



# テリーとロバート

*Terry and Robert*

マリアンヌ・ライト 作

前橋梨乃 訳

# Contents

(タップすると、章頭に移動します。)

はじめに

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

おわりに

## はじめに

このお話は、ラブストーリーです。そして、実際にあった話でもあります。私の記憶の許す限り、起こったことを正直に書いたつもりです。

実話だからこそ、そこには、失望や痛みがあります。そして同時に、そこには、発見や希望や喜びもあります。実話だからこそ、混乱も多く、尻切れトンボに終わってしまう感があるかもしれません。

でも、これはラブストーリーなのです。

そして、多くのラブストーリーがそうであるように、それは、ケンカから始まります。

# 第1章

## パス

僕は、激怒していた。猛然と怒り狂っていた。

だから、これまで親友だと思っていたロバートを路上に置き去りにしたまま、地下鉄の昇降口を駆け下りたのだ。ブルックリンのアパートに帰るためにA系統の電車に乗ったときも、怒りで口がきけないほどだった。R系統の電車を降りるときでさえ、まだ怒りに震えていた。

そして、エレベーターのない3階建てアパートの階段を駆け昇り、自分の部屋のドアを閉めるやいなや、僕は拳で家具をたたき、ロバートと、この世界のすべてをののしった。最後には、窓辺に立ち、泣き出してさえいた。

僕は、ロバートに裏切られたと感じ

ていたのだ。

彼との間に生じがちな問題については、何度もうまくパスしてきたはずだったし、彼自身、もう二度と言わないと約束していたではないか。

もちろん僕は、ロバートがゲイであることは知っている。彼自身、隠そうとはしなかったし、僕もそれを認めた上でつきあってきたのだ。たしかに二度ほど、彼がその手のことを言い出したことはあったが、僕は断固拒否し、彼は謝った。そして、今後、僕にそれを求めないと約束した。その約束の上で、友人関係をつづけてきたはずなのに……。

僕とロバートは、昔からの知り合いだったわけではない。

あれは、僕が26の時だ。僕は、写真のデジタル処理とグラフィックデザイン

ンの世界で、仕事が軌道に乗り始めていた。と言っても、大学を出て4年、やっと毎月の請求書に釣り合うだけの収入が得られるようになったということだ。

日々の贅沢といえは、せいぜいラケットボールを楽しむくらいだった。国内有数のリーグに加盟するジムに通い、チームの中ではいちばん貧弱で運動選手らしくないにもかかわらず、上級の中くらいの実力と目されていた。

ともかく、そんな2002年の4月はじめだった。僕は、受注した仕事の納品のため、モレル・グループの本社を訪れていた。

この会社で、会議室のレイアウトを変えようとした時、誰かが誤って壁に飾ってあった創業者ジェームズ・モレル氏とその子息の写真を落とした。そのせいで大事な写真に傷がついた。18

93年に撮られたというその誉れ高き写真には、ネガも残っていない。困った会社が、僕、テランス・カーンの名前を見つけ出し、修復を依頼してきた。

僕は、その写真をスキャナーにかけ、マック上で修復し、ぼやけていた部分もシャープにし、撮られた当時のイメージに復元した。プリント業者にデータを渡し、小判と大判のプリントをつくり、約束どおりその週のうちに納品。そして、受付で小切手の支払いを待っていたというわけだ。

僕が受付嬢にちょっかいを出している時、その男は入ってきた。

年齢は僕より少し上だろうが、さほど変わらない。でも、外見は大きく違っていた。

僕は、背伸び気味に立っても5フィート7インチ(約170センチ)しかない。髪は黒い直毛をぼさぼさに伸ばし、低

めの鼻やほお骨、それに、まばらなひげと合わせれば、アメリカ先住民の血をひいていることはすぐわかるはずだ。

それに比べ、男の方はといえば、6フィート2インチ(約188センチ)くらいあり、髪はくすんだブロンド。スポーツマンらしく、よく日に焼けていた。「ロバート・スタンスといいます。ミラーさんとお約束があるのですが」

彼は、受付嬢にそう告げた。

そして、彼女が電話を入れているうちに、横にいた僕のバッグからラケットの柄がつき出ているのを見つけ、ラケットボールをやるのかときいてきた。

「ハエたたき代わりに持ち歩いてるんです」

僕がそう答えると、彼は笑い返した。彼がオフィスに呼ばれるまでの間



に、僕らは携帯の番号を交換し、試合の約束をしていた。

数日後、僕らは、彼の通うジムで手合わせし、15対9と15対11で僕が連勝した。彼は素直に負けを認めたが、今度はテニスで勝負しようと言った。

試合のあと、ジムのバーでジュースを飲みながら、メッツとヤンキーズのどちらが強いかを論争し、別れ際には、翌日、酒を飲む約束を交わしていた。

もちろん、僕はそれを、ごくふつうのことと受け止めていた。二人の男が、スポーツを楽しみ、野球談義をし、いっしょに飲む。それだけのことだ。

でも、彼にとってそれは、新たな恋の始まりだったようだ。

たしかに、僕自身も、ロバートに興味を抱いていたことはまちがいない。

時は、ちょうどITバブルがはじけはじめた頃。ロバートが起業した会社は、倒産しかかったIT企業を買い取り、M&Aを仕掛けるという仕事で利益を上げていた。その経営は、僕の仕事同様、最近、黒字に転化したばかりだったが、その黒字幅には大きな差があった。彼の会社にはすでに3人の従業員がいたし、出資者に配当も出していた。彼自身も、そうとうなサラリーを手に行っているようだ。早い話、僕が26歳でサバイバルしているのに対し、彼は31歳でサクセスしているということだ。

そんな興味もあり、その後、僕は、ロバートといっしょにナイターを見に行ったり、テニスをしたり（僕は手ひどくやられた）、何度か飲みに行ったりした。うち一度は、レストランでデ

イナーをごちそうになった。

そこは、ウエスト・ビレッジでも有名な「ケージャン」という店で、彼のマンションからも比較的近い場所だった。

食事が終わり、デザートにさしかかった時、彼が身を乗り出しながらきいてきた。

「僕の部屋に、来ないか？」

もう夜も更けていたから、それは、もしかすると、泊まっていけということかもしれない。

そう思った僕がポカンとしていると、彼は、確かめるように言った。

「テリー、僕は、パスしたんだろ？」

その言葉に、やっと僕は、彼の期待していることに気づいた。

一瞬、時が止まったように感じ、おろおろと目を泳がせた末、僕は言った。

「ひょっとして、君って、ゲイなの

か？」

一拍おいた後、僕らは笑い出していた。その笑いは、神経質でありながら、どこか開放感もある、複雑なものだった。お互い、これまで、大きな誤解の上につきあっていたことに気づき、納得もできたからだ。

そのあと、ロバートは何度も謝り、僕は、べつに何とも思っていないと言った。そして、それを証明するためにも、彼の部屋に寄ることにした。

玄関にドアマンまで立っているマンションの部屋は、仕事場兼用の僕の部屋などとは段違いの、大きな2LDKだった。賃貸料がいくらくらいなのか、僕には想像さえできなかつた。

僕らはそこで、ちょっとビールを飲みながら馬鹿話をし、最後に、僕にとって、彼がパスできるのはここまでの関係だということ念を押し、帰路に

ついた。

その後、僕らはさらに親しくなってい  
いき、少しでも空き時間があれば誘い  
合うという仲になった。

僕は、ブルックリンのなじみの店に  
彼を連れて行き、彼の方も、マンハッ  
タンのなじみのレストランや、時には、  
ストレートでもいやな顔をされない2  
軒のホモバーに僕を案内した。

もちろん、いっしょに野球を見に行  
って、お互いのひいきチームをこき下  
ろすこともつづけていたし、それぞれ  
の仕事の将来について、まじめに語り  
合うこともあった。

彼といると気持ちが落ち着いたし、  
安心できる感じがあった。クライアント  
がとぎれる不安を胸に抱きながら仕  
事に精を出す毎日は、けっこうつらい  
のだ。

ロバートの方も、経済動向や会社経営に神経を遣う日々の疲れを、僕と会うことで癒しているようだった。

僕はまだ、結婚したいと思うような女性と出会ったことはなかったのだが、長年胸に抱いてきた理想の女性のイメージはある。そんなことをロバートに語ったことがある。

彼もまた、理想の恋人と出会ったことはないと言い、彼の心に秘めたファンタジーを話してくれた。

あれはたしか、38番街の「チャールズ・ドッジワース・バー・アンド・グリル」という店に行ったときだ。常連は「チャールズ・ドッグ」と略して呼ぶ店である。ここは、ホモバーではないまでも、ゲイやトランスジェンダーなども平気で出入りしている。一隅にレザーで身を固めたボンデージ趣味ら

しい連中が陣取っていることもあるし、ストレートのカップルにまじり、ゲイのカップルもちらほらいた。まあ、僕の所属する広告業界なんてそんな人種だらけだから、僕にとっても、さほど違和感のある場所ではない。

テーブル席でお互い2杯目の酒を飲んでいるとき、ロバートがしきりに誰かを見ているのに気がついた。その視線をたどると、店のテレビを見ているひとりの女性がいた。

「あの子、かわいいよな」

ロバートが言ったので、僕ももう一度彼女に目をやり、うなずいてから言った。

「でも、君には守備範囲外だろ」

「いや、そうでもないんだ」

ロバートはそうつぶやいたあと、昔、女性とつきあっていたこともあるのだと答えた。

「じつは、僕の好みは、ちょっとやっかいでね。話してもいいかい？」

僕がうなずくと、ロバートは、まるでカミングアウトして重荷を下ろすとしてもいうように、半時間ほど自分の嗜好について語った。

彼は、ただ見ているだけなら女性の方がいいのだという。道を歩いていても女性に目がいくし、女性らしいファッションや香水の香りも好きだ。ところが、ベッドの上ではゲイなのだ。男にしか興奮しないらしい。だから、彼の理想は体の小さな男。女装すれば、女として立派にパスできるような男。そんな男と暮らしたいのだと言った。そして最後に、僕にそんな理想を見ているのだと語った。

当然ながら、その言葉に僕は腹を立てた。今回こそは本当に怒り、僕はストレートなのだということを再確認さ



せた。

僕は彼の人柄を気に入っているし、いっしょにスポーツを楽しんだり飲んだりするのは好きだ。でも、ベッドまでつきあうつもりはない。もしまた、そんなことを言い出したら、もう友人関係をつづけていられないと告げた。

ロバートはまた謝り、もう二度と口にしないと約束したのだった。

それでも僕の腹の虫は収まらず、その夜はけっきょく早めに別れ、そんな気まずさもあって、それからしばらく会わずに過ごした。

しかし、お互いなんだかさみしさが募り、一週間後にはどちらからともなく電話し、二人で映画を見に行った。その後、なじみの店に寄り、常連との会話を楽しんだりした。

そして二三日後にはまた、イタリア

料理とエキサイティングな夜を楽しむために、ブルックリンの「フランコの店」で落ち合った。そのレストランのテレビで、セリエAの試合を見たのだ。

そんなふうに日々が過ぎ、九月に入ったその日、僕らはまた、ビレッジの彼の家のそばにあるレストランに行った。そして食後、なんとなく公園をぶらつき、ベンチに腰掛けた。

と、そこでまた、ロバートが、いっしょに暮らそうと言い出したのだ。

今回は、これまでとちがい、最初から懇願するという口ぶりだった。彼の頭の中ではすでに、僕が彼の部屋に引っ越していっしょに住むという構想ができあがっているらしく、さまざまな理屈を並べた。

僕にガールフレンドはいない。僕らは今でもプライベートな時間のほとん

どをいっしょに過ごしている。僕は、きっと女装が似合うはずだ。仕事の面においても、彼は、僕のクライアントを増やす力になれるにちがいない。彼のマンションにはベッドルームが2つある空き部屋もあるし、なんならそこに引っ越してもいい。僕の愛称「テリー」は男としても女としても通用するのだから、呼び名を変える必要もない。金銭的援助だってできるから、これまでのようにつましい生活をしなくてもよい。もし、僕が仕事をしたくないというのなら、「専業主婦」として暮らせるだけの余裕だってある……。

そんなことまでまくし立てた彼に、僕は完全にキレた。そして、怒りの言葉を残し、ブルックリンの自室まで戻ってきた……というわけだ。

部屋の呼び鈴が鳴ったのは、僕がま

だ窓辺で泣いている時だった。だから、僕はそれを無視したのだが、どうやら入ってくるときに鍵をかけ忘れてらしく、訪問者の方が勝手にドアを開けた。

その音に、僕が振り向くと、アンネが立っていた。

アンネとピーターの夫婦は、僕とほぼ同時期にこのアパートに入居した隣人だ。彼らはともに芸術家だったが、それでは食えず、美術学校の非常勤講師(アンネ)や水道工事店のバイト(ピーター)で生計を立てている。僕にとっては、ロバートに次いで、気のおけない友人だった。

僕は、ちょっとした間、アンネの顔を見ていたが、そこで言った。

「返事もしないのに、入ってきて……」  
「だって、心配になったから。ドアの音が大きく響いて、家具をたたく音がして、そのあと、泣き声が聞こえてき

たのよ。気にならないわけがないじゃない」

そこで僕の顔をちらりと見た後、アンネは言った。

「何があったかはきかないわ。でも、うちに来ない？」

僕は行きたくなかったのだが、アンネに強引に誘われ、彼らの部屋の古いソファに座った。そして、そのとたん、心の内をとうとうとしゃべっていた。

しゃべればすっきりすると思ったのだが、僕の心はかえって沈んでいった。

これまでの人生でいちばんの親友を見捨て、失ったのだという気持ちにさいなまれたのだ。話し終えた僕は、いよいよ救われない気分の中で黙り込んだ。

その長い沈黙を破ったのは、ピーターだった。

「ほんとに気味悪い話だな」

彼は吐き捨てるように言った。

「そんなやつとは、二度と会うべきじゃないね。聞いただけでヘドが出そうだ」

そこでふたたび会話がとぎれ、しばらくしてアンネが口を開いた。

「ねえ、テリー。あなたがあそこまで泣かなきゃいけなかった理由を話す相手は、私たちじゃないのかもね」

「……ロバート」

僕は思わず口走っていた。

「そうね」

アンネは、それにうなずいた。

「彼の言ったことがどんなに理不尽だとしても、彼は正直に告白したんだと思うわ。あなたも、もっと正直になって、もう一度、彼と会ってみる必要がある気がする」

「なんで？」

ピーターと僕は、同時に聞き返して

いた。

「どうして、いけないの？」

アンネはそう言った後、自らの考えを述べた。

「いつもいっしょにいたいと感じている二人がいる。二人は、お互いの心の内を語り合い、他の誰にも話したことのないお互いのファンタジーさえ知り合っている。そのことによって、二人とも心の重荷を下ろすことができる。今、ロバートへの怒りをぶちまけていた時でさえ、あなたはここにはいなかったわ。あなたの気持ちは、彼の部屋に飛んで行ってるように見えた。そういう感情を、ふつう、恋愛っていうんじゃないのかな。あなたの行動は、気持ちとは裏腹なんじゃない？ たぶん、あなたは、本心では守られたいと思ってる。誰かさんの腕の中でね」

「そんな……」

僕は反論した。

「だいいち、僕はゲイじゃないんだから。ロバートといっしょにいるのは好きだけど、それは、ベッドの中でじゃない。男とセックスするなんて気持ち悪いこと、考えるのもいやだよ。その上、ロバートは、僕に女装させたいって言うんだぜ。女としてのテリーを求めてるんだ」

「もっとはっきり言えば、君の尻の穴をとってことだろ」

ピーターが口を挟んだ。

「ミスター・ロバートはそんなセックスをしたがっている。でも、テリーはそれを望んでいない。むずかしく考えなくても、答えははっきりしてるじゃないか」

「たしかに、セックスの好みは、誰にとっても重大なことよ」

アンネが言い返した。



「だけど、それが完全に一致しなきゃつき合えないってわけじゃないでしょ。たとえば、いっしょにいたいという思いから、努力して相手に合わせる場合だってあるわ。それだって、立派な愛だと思うんだけど」

僕は、アンネとピーターの夫婦生活がどんなものなのか、ちょっと疑問に思った。二人が深く愛し合っているのは間違いないだろうが、そのコメントには、多少とげがあるように感じたのだ。

と、アンネがつづけた。

「既婚女性の多くが性生活に不満を感じてるっていうけど、でも、彼女たちは、それで離婚しようとは思わない。たとえセックスの好みが食いちがっていたとしても、パートナーを満足させるために努力して、それで幸せな結婚生活を送っているカップルなんて、い

くらでもいるわ。テリーの場合、それとどこが違うわけ？」

アンネはそこで一呼吸置いてから、僕に顔を向けた。

「ねえ、テリー。あなたにとってロバートがどんな存在なのか、もっと考えてみる必要があると思うの。あなたが腹を立てるのはわかるわ。でも今、彼の方は、そのことで深く傷ついてるはずよ。で、自分を責めてる。あなたの方は、これまでどおりのつきあいをつづけたいと思ってるんでしょうけど、あなたのすべてをほしいと感じている彼にとって、それは拷問以外の何ものでもないんじゃない？ そのあたりは、女の私なんかより、男のあなたの方がよくわかると思うんだけど。私が今、女としての経験から言えるのは、いくら腹が立っても、簡単にすべてを精算しようなんて考えない方がいいっ

てことだけ」

そこでピーターは、あきれたように首を振りながら窓辺へと立った。

「俺には理解できんな。だけどテリー、これだけは覚えといてくれ。たとえどんなことになったとしても、俺とアンネは、君の味方だからな」

するとアンネが、その言葉を訂正した。

「アンネと俺は、でしょ」

それに全員が笑ったのをきっかけに、僕は部屋へと戻った。

心の動揺以上に、眠気が襲ってきたのだ。

## 第2章

### お金のためではなく

次の日、僕は電話を留守電にしたまま、ある個人経営の画廊から依頼されたパンフレット制作に精を出した。とはいえ、そんなに電話がかかったわけでもない。クライアントのひとつからオーダー変更の連絡があっただけだ。

そして、2本目の電話が入ったのは4時半。ロバートからだった。

僕は、受話器をとらずに、そのメッセージを聞いた。

「やあ、テリー？　僕……ロバートだ。昨日は、ひどいことをしたと思ってる。謝るよ。あんなことは、言うべきじゃなかった。ゆうべは、あのまま、ほとんど眠れなかったんだ。だから、酒も飲んでないのに、今日はふらふらだよ。できたら、電話をくれないか？　……

頼むよ。……待ってるから」

それからしばらく、僕はじっと座ったまま、電話をにらみつづけていた。何度か受話器に手を伸ばしかけたが、電話したところで、何を話したらいいのか、よくわからなかった。

そのあと、気分を変えるためにぶらぶらしてこようかとも思ったが、明るい窓の外を眺めただけで、その気も失せた。

ふと周りを見回すと、缶ビールが一本、ふたを開けたまま置いてあるのに気がついた。たぶん僕自身が開けたのだろうが、いつの間にそんなことをしたのかさえ、記憶になかった。手に取ってみるとまだじゅうぶんに冷たかったので、僕はそれを飲んだ。

しばらくして、「そうだ、電話しなきゃ」などと口走っている自分に驚き、そこで、ロボートの番号を途中まで押

しかけていた手を止めた。

そのあと、僕はけっきょく、お気に入りの椅子に座って、ただ壁をながめていた。頭の中では、昨夜のアンネの言葉がぐるぐるめぐっていた。

「そういう感情を、ふつう、恋愛っていうんじゃないのかな。あなたの行動は、気持ちとは裏腹なんじゃない？」

そして――

「たしかに、セックスの好みは、誰にとっても重大なことよ。だけど、それが完全に一致しなきゃつき合えないってわけじゃないでしょ。たとえば、いっしょにいたいという思いから、努力して相手に合わせる場合だってあるわ。それだって、立派な愛だと思うんだけど」

そこで僕は立ち上がり、バスルームに向かった。

この部屋のバスルームはけっして広

いとは言えないが、全身が映る鏡がついている。僕はその前で、ブリーフ以外のすべての服を脱いだ。そして、鏡の中の自分の姿を、女だと想像してみようとした。

多少骨張ってはいるが、やせている。ヒップにボリュームはないが、肩幅は狭い方だ。ぼさぼさの長髪代わりに濃くないひげは、一週間に二度のひげそりでこと足りた。それに、体毛もまばらだ。

全体として、男らしくないのはたしかだったが、だからといって、このままで女に見えるわけでもなかった。

ふたたび服を着たところで、食料品を買いに出た。

その道すがら、僕はいつもと同じように、すれちがう女性たちをちらちら見ていた。ただ、その視点は、いつも

とはちょっと違った。僕は彼女たちのファッションを見ていた。彼女たちが、それをどんなふうに着こなし、どんな仕草をしているかが気になった。

そして部屋に帰る頃には、もしかしたら、僕にも彼女たちのまねくらいできるんじゃないかという気がしてきた。女に見せるだけなら、僕には、さほど難しくないと思えたのだ。

ただ問題は、本当にそんな必要があるのかということだった。

と、そこへまた、ロバートからの電話がかかってきた。今回も留守電のまま、メッセージを聞いたのだが、それは、さっきにも増してせっぱ詰まった口調だった。

僕はすぐにでも折り返しの電話を入りたい気分になった。でも、まだその勇氣は出なかった。とはいえ、今の声を聞いた後では、そのまま部屋に居つ



づけることもできそうになかった。

僕は手早く夕食をつくり、食べ終わると、財布の中を確かめ、飲みにもで行こうと思った。

夏の夜のブルックリンは、ぶらぶらするには格好の場所だ。マンハッタンなどとはちがい、気楽な普段着感覚で歩けるからだ。

文字通り普段着のままぶらぶら歩き、気がつくとい僕は、「ザ・ダウンズ」というリサイクルの雑貨屋の前に立っていた。

一年ほど前、オーナーのパトリックに頼まれパンフレットをデザインして以来、彼とは——親友とは言えないまでも——気軽に話せる仲になっていた。

たとえば、誰かに贈り物をしようと思ひ、迷ったときなど、僕はこの店に

来て、一風変わったその品揃えを見てまわった。ある棚にはキプリングの短編集全11巻があるかと思えば、別の棚には1950年製のベークライト・ラジオがのっていたりするのだ。アーティスト指向の友人への贈り物をあさるには、まさにうってつけの店だ。

そして、その品揃え以上にこの店を有名にしているのは、店主のパトリックがゲイの活動家であることであった。

ショーウィンドウ越しに店の中をのぞきながら、僕は、何気なく歩いて来たつもりでも、じつは、僕の潜在意識がここに来させたのだと感じた。そして、そのことによって、僕がすでに、心の中である決意をしているのだということに気がついた。

「やあ、パトリック」

店に入るとすぐに、僕は声をかけた。

「まあ、テリー」

彼のよく響く声が返ってきた。

パトリックの身長はロバートと同じくらいだが、体重は30ポンド以上重いだろう。彼は、その体に似合わぬスピードで近づくと、僕をハグした。

「今日は何がお望み？ この30年代製のコーヒーセットなんて、おすすめよ。ほぼワンセットそろってるし、このテーブルにはぴったりでしょ。テーブルとセットにして230ドルでどう？ ううん、友達のおしきみで200ドルでもいいわ」

「いや、今日は違うんだ」

僕は、そこで大きく深呼吸してからつづけた。

「じつは、折り入って相談したいことがあるって……」

そのあと僕は、2時間ほどパトリックと話し込んだ。

彼は、僕の決意に諸手を挙げて賛成というわけでもなかったが、それでも、応援すると約束してくれ、いろいろアドバイスもしてくれた。

「最初から極端に走るのは、無理が多いと思うの。できることから、少しずつ進めていったら？ 大事なのは、彼に、今のあなたの気持ちをちゃんとわかってもらうってことですよ。あなたが何をしてもらいたのか、そのために、あなたに何ができるのか」

店を出るとき、僕は、別のある店の住所と、ある電話番号と、そういうことについて書かれた本を2冊手にしていた。そして、迷いを捨てるための勇気も。

家に帰ると、さっき聞いたあと消去したはずの留守電に、また、ロバートのメッセージが入っていた。

そのあと僕は、しばらくの間インタ

一ネット上で情報を集め、女物の服と女装用品のウェブカタログに目を通した。

部屋の灯りを消した時、時計は午前1時を回っていた。

翌朝、僕は、ロバートが出勤するはずの時間まで待って、彼の部屋に電話を入れた。そして、留守番電話のピー音が聞こえたところで、こう録音した。「やあ、ロバート。テリーです。やっぱり僕らは、話し合った方がいいと思う。あのあと僕は、君の言ったことをずっと考えてたんだ。で、このままうやむやにしてしまうのは、やっぱりよくないって思った。今夜、君の部屋でいっしょに飲まないか？ ワインは、僕が用意するから」

午前中、僕は、仕事がさっぱり手につかなかった。納期の迫った仕事にな

いのが幸いだった。

そうこうするうち昼になり、僕は、若干の衣類と、いつも飲んでいるのよりずっと高級なワインを買いに街に出た。

ちょうどワインショップにいるときに携帯電話が鳴った。ロバートからだった。

8時頃、僕が訪ね、飲もうということにはなったが、会話には、どうしても気まずい雰囲気が出た。この電話では、あえて、僕の気持ちが出しきれないような話し方をしたからだった。

午後もやはり作業が手につかず、3時をまわったところで、僕は今日の仕事をあきらめた。

そこで、音楽をかけ、別の「作業」に取りかかるためにキッチンで早い夕食をとった。緊張のせい食欲はなか

ったが、それでも、チキンとサラダだけはなんとか押し込み、僕は、寝室兼用の仕事場に戻った。そこで着ているものをすべて脱ぎ、そのままバスルームへと向い、シャワーを浴びた。

「いいか、テリー」

僕は、厳しい教師の口調で、自分自身に言ってみた。

「これまで君は、覚悟を決めて何かに取り組んだことなどなかっただろう。でも、今回ばかりは、そうはいかないぞ……」

そこまで言ったところで、吹き出した。そして、僕はカミソリを手を取った。

僕は、陰毛の一部を残して、すべての体毛をそり上げたのだ。

そのあと、体を洗い、シャンプーした。使ったのは、いつもの石けんではなく、強烈でないまでもフェミニンな

香りのするボディソープだった。ロバートが、香水の香りが好きだと言っていたのを思い出し、買ってきたものだ。

バスルームを出て、僕は用意しておいた服を身につけた。

パトリックは、できることから進めればいいと言っていたし、だいいち、僕には女装の経験なんてない。だから今夜は、僕の気持ちどちらを向いているのか、それをロバートに悟らせるだけでいいと思っていた。もちろん、今夜、ロバートの前で裸になる気もない。

それでも僕は、今日買ったばかりの新品のブリーフをはいた。これまで一度だって買おうと思ったことなどない、贅沢なシルク製だ。

それから僕は、膝丈の、薄い女性用ナイロンストッキングをはいた。これ



を買う時は、さすがに恥ずかしかった。紹介してくれたパトリックによれば、この店は「承知している」ということだったが、なんだか、店中の人はこちらを見ているような気がしたのだ。

次は、明るい茶色の柔らかい生地のできたパンツ。ふつうの男性用ズボンに比べればずっと細身の縫製で、脚の線が浮き出す。

最後に、やはり今日買ってきた白いシルクのシャツを着て、首には、細いゴールドのチェーンをつけた。

靴はローファー。いつも履いている男性用デッキシューズよりカットが低く、そこから、ストッキングの足がのぞいていた。

これで準備は完了した。

これらの買い物のおかげで、僕の預金残高は心細いものになっていたが、だからこそ、もう後戻りはできない気

がした。

僕は、鏡の前に立ってみた。

いつもの服装とはちがうその姿は、多分に女っぽかった。でも、この程度なら、この街には、いくらでも着ている男はいる。

重要なのは、ロバートはこれまで、こんな僕を見たことがないということだ。

鏡を見ながら、僕は、生地が薄すぎたのではないかと戸惑い、逆に、もっと女っぽくした方がよかったのではないかと迷い、そもそも自分にはまったく服のセンスがないんじゃないかと心配になり、そして、ドアを開けたとたん、ロバートが笑い出すのではないかと不安になった。

それから僕は、やはり今日の買い物のひとつである茶色のベレー帽を、いつも使っている黒いウエストポーチに

しまった。

それだけの作業を終えても、時計はまだ5時半を指していた。そして、その針は、まるで糖蜜の中を進むとでもいうように、ゆっくりと動いていた。

それで僕は、テレビのニュースを見、テレビゲームをし、パトリックが貸してくれた本を部分的にもう一度読み直したりして時間を過ごした。自分自身の考えていることに吐きそうで、トイレに飛び込みたいのを、なんとかごまかそうとしていたのだ。

7時20分になったところで、僕は、冷蔵庫から取り出したワインボトルをギフト用の袋に入れ、部屋を出た。

アパートを出る前に、アンネとピーターの部屋をロックした。

ピーターがドアを開け、その肩越しにアンネも顔を出した。

「……どうかな？」

僕が言うと、ピーターはまた、あきれたように首を振った。でも、アンネは、僕のほおにキスし、「だいじょうぶ、きつとうまくいくわ」と言ってくれた。

地下鉄に乗っている時間を、いやに長く感じた。他の乗客たちにじろじろ見られ、笑われているのではないかと思ひ、落ち着かなかったからだ。しかし、時間がたつにつれ、僕よりもっと風変わりな服を着ている人間が何人も乗っているのに気づき、少し冷静になれた。

ついに電車は14番街に着き、僕は地下鉄の出口を出て、ロボートのマンションへと向かった。

入っていこうとすると、ドアマンが僕を呼び止め、ロボートの部屋に電話で確認をとってから入れてくれた。

エレベーターに乗り「8」を押す。上昇する間に、僕は例のベレー帽を取り出してかぶった。磨き上げたエレベータの壁にぼんやり映る自分の姿を見つめながら、それがおしゃれに見えるように、ちょっと傾けてみたりもした。

8階に着き、ドアが開いたところで、僕はまた、踏み出すのをためらった。その先に見えた廊下もぴかぴかに磨かれているというのに、なんだか暗く、どこまでも続いているように感じたからだ。

でも、思いきって踏み出した僕は、ロバートの部屋、8Eへと向かった。

ブザーを押すとすぐにドアが開き、ロバートが顔を出した。

最初、その顔は、まるで怒っているようにこわばっていた。でも、僕と目があつたところで、表情が複雑に変化した。驚き、喜び、不安、そして恐れ

さえも、そこにはあった。

僕は、彼が口を開く前に、彼の真正面に立って言った。

「ロバート、お金のためなんかじゃないからね」

### 第3章

『イエスタデイズ・クローゼット』と『ベッカの店』

その夜は、なんだか不器用に時間が過ぎた。

ワインの栓を抜くまでの30分ほどは、それでも、まだよかった。

玄関でロバートは僕をハグしたが、それ以上のことはしなかった。部屋に入り、お互いしばらく口ごもったのち、ぼそぼそと会話が始まった。

僕は、自分のしていることにまだ戸惑いがあることを伝え、ことに、性的関係など、今はとても考えられないと話した。

ロバートは、僕がいやがることはけっしてしないと誓い、今、自分の気持ちがいかに浮き立っているかを、熱心に語った。

そこで僕は、ロバートが期待するような方向で同居できるかどうか、少しずつ試してみると言い、彼もそれにうなずいた。

意見が対立したのは、お金の話が出てからだった。

ロバートは、僕のために小切手を切ることを望み、僕はそんな気はないと断った。

すると彼は、「これから君には、多くの出費が必要になるはずだ。そしてそれは、僕のためにやってくれることだ。だから、僕には、それを援助する義務があるし、そうすることが僕自身の喜びでもあるんだ」と主張した。

けっきょく、部屋を出るとき、僕は1000ドルの小切手と300ドルの現金を持たされていた。その上、ロバートは、彼が契約しているハイヤーまで呼んでくれた。



自分のアパートに戻ったあと、僕はちょっとだけ寝酒を飲み、それでも眠れず、1時までなんとなくテレビを見ていた。別れ際の玄関での出来事が、頭から離れなかったのだ。

「キスしてもいい？」

ロバートがそう言い、次の瞬間には、僕は彼の腕に包まれていた。そして彼は、僕のほおにキスしてきた。

そのキスが、一瞬ちょっとふれただけのものだったにしても、僕は、自分がそれをけっしていやがっていないことに驚いた。

僕らの間には、やはり友情以上のものがあるのだろう。

1時半になったところで、僕は電気を消した。あれこれの気疲れのせいかな、その夜は、夢も見なかった。

起きるとすぐに僕はコーヒーを飲み、とりあえず昨夜のことは頭の隅に押しやって、仕事に没頭した。昼食の時間になり、僕は仕事机の脇に立ったまま、チーズとリンゴスライスをほおぼり、午前中にやった写真修復のできを確かめた。そして、その仕事が、予定よりずっと速く進んでいることを確認した。

つまり、今日はこのまま仕事を中断しても、納期遅れの言い訳を考える必要はないということだ。それで僕はまた、買い物に出かけることにした。

僕は手にしたリストを見た。パトリックに書いてもらったものだ。

その1行目には「イエスタデイズ・クローゼット」という店名と、イースト・ビレッジの住所が書かれていた。パトリックは、この店のローレンスか

アビーに任せれば、すべてうまく運んでくれると言っていた。

地下鉄は、昼なかには混んでいて、僕は、自然と女性の乗客たちを観察していた。

そのうちの一人に、目が引きつけられた。彼女は、5フィート6インチ(約168センチ)くらいで、やせていて胸も小さい。黒髪で、インド風ファッションに身を包んでいた。半なめしの革スカートとゆったりしたブラウスだ。スカートの方は、そういうデザインらしく、細かいしわが入っている。そこに白と黒の模様が連なっていた。ブラウスはわずかに透けていて、下につけたブラの輪郭が判別できた。ネックラインは襟なしで、周囲をレースが取り巻いている。バレエシューズに似たスリッポンを履き、細いシルバーのチェーンを何重にもしたネックレスとブレス

レットを着けていた。

僕の視線に気づいたらしく、その女性が笑い返してきたので、僕はあわてて目をそらした。

アスター・プレース駅で地下鉄を降りた僕は、その店を探した。

そして、「イエスタデイズ・クローゼット」という看板を見つけ、前に立ってショーウィンドウをのぞき込んだ。どうやら古着屋らしかったが、単に中古衣料というだけでなく、芝居かなにかの衣装のように、カジュアルとはいえない大時代なデザインが多い気がした。

パトリックは何を思ってこんな店を教えてくれたのかと首をかしげていると、いきなり店の中から女性が顔を出し、僕は思わず逃げ出しそうになった。「いらっしやい、ハニー。公正価格と

お客様第一がうちのモットーよ」

考える間もなく招き入れられた僕は、店内を見渡した。

目の前には、まるでローリング・トゥエンティ (訳注 激動の20年代) を描いた映画にでも登場しそうな、小さなビーズで覆われた黒のドレスがあった。僕の後ろには、男物だが、紫の、ベルベット・タキシードが飾られていた。

と、その女性が顔を近づけ、言った。

「どんなのが、お望み？」

僕はちょっともじもじしていたが、まずこの気まずさを取り払おうと、パトリックの名を出してみた。彼女の顔を見ながらそんな至近距離で話しているうち、僕はある疑問を感じ、思わずきいていた。

「もしかして君は、トランスベスタイト (訳注 異性装者)？」

「ええ、そうよ。って言うより、トラ

ンスジェンダーって言った方がいいかな。2年前に手術してるしね。元エイブ・グラック、今はアビー・グラックよ。じゃあ、こっちへ来てくれる」

自分の物語はほんの数秒ではしより、彼女は僕を店の奥へと導いた。そこで、ローレンスを呼んだ彼女は、代わりに店番していてくれと伝え、僕をさらに、カーテンの向こうへと引き込んだ。

「じゃあ、始めましょうか。とりあえず、下履き以外は全部脱いでくれる？」

「えっ？」

僕は、思わず聞き返していた。

「ハニー、あたし、男の裸なんて見慣れてるし、自分で持ってたことだってあるのよ。あなたは特別な目的のためにここに来たんでしょ、いくら、あたしたちがそれに協力できるっていても、あなた自身が恥ずかしがってちゃ、

何も進められないじゃない。さあ、早く脱いで」

その言葉に服を脱いだ僕は、ちょっとふるえていた。寒かったこともあるが、何よりこの状況への困惑のせいだった。

アビーは、そんな僕の体に、次々にメジャーを当てていった。それは、僕が想像していたウエストやバストやヒップ(「ハニー、あなたも女の子なら、尻なんて言っちゃだめよ」)ばかりでなく、腿のまわりや首まわり、肩幅、さらには、背骨からへそまでの左右の長さのちがいにまで及んだ。僕はまるで、考古学者に測定されている発掘品にでもなった気がした。

作業を終え、伸びをしたあと、アビーは言った。

「覚えといて。あなたのサイズは10号よ。それだと、ヒップはちょっとだぶ

つくかもしれないけどね。お尻の形はかわいいんだけど、やっぱりボリュームが足りないもんね」

その言葉に顔を赤くしていると、アビーはさらに、観察するという目で見ながら、僕のまわりをまわった。

「で、あなたは、どんなキャラの女の子になりたいの？ ハデなお姉ちゃん？ キャリアウーマン？ スポーツウーマン？ それとも、あばずれ？」

その時、僕は、まるで夜の国道に飛び出した子鹿のように見えたに違いない。アビーは、急ブレーキをかけたあとのドライバーのようにため息をついた。

「あなた、何も考えてこなかったのね。このローブを羽織って、ここに座って」

それから15分ほど二人で話し合った末、僕はふたたび立ち上がった。けっきょく、アビーが主張した、ふつうに



働いているけれどちょっとだけ不良っぽさのある女性という線で妥協したのだ。

次に行く予定になっている「ベッカの店」という美容サロンには、すでに電話で予約が入れてあった(「だいじょうぶよ、ハニー。あなたと同じような人、私のお客さんにはたくさんいるから」)。その時間のこともあって、早めに決めなければいけなかったからだ。

本当のことを言えば、僕は、先刻、地下鉄で見た女性のような方向で行きたかったのだが、アビーに話すと、彼女はそれに首を振った。

「もし、女性としてパスしたいなら、あなたの弱点から、人目をそらす必要があるでしょ。そんな、ヒップにボリュームが必要なスカートは、すすめられないわ」

僕があきらめて立ち上がったところで、アビーはつづけた。

「さあ、ローブを脱いで。今度はブリーフもね」

僕は、仕方なくそれに従いながら、前のものが立ち上がらないことを祈った。でも、それはうまくいかなかった。

「ふふ、すてきよ」

アビーは笑いながらそう言って、そのあと、こうつけ加えた。

「でも、気にしないで。私がそこを見てるのは、あなたの下着のサイズを確認したいだけなんだから」

前にまわり込みながら、さらにつづけた。

「あなたって、けっこうお金持ちなのね。今脱いだブリーフ、安物じゃないでしょ」

そこで僕はちょっと頭を巡らせ、今後の出費のことも考えて、今日の予算

は300ドルまでだと宣言した。

アビーは、それで何とかしてみようという感じでうなずいた。そして、段ボール箱の中をがさごそかき回すと、そこから、いくつかのもの——ピンクやライトブルーやレース製や——を取り出した。

「お尻の形そのものはいいから、とりあえずガードルとかは必要ないわね。ライクラ(訳注 伸縮性の強い繊維)かゴムを編み込んだパンティで十分でしょ。このブルーのをはいてみて」

僕は、それを受け取ると、アビーに背を向け、生地がよじれないように慎重注意しながら足を通していった。でも、「もうひとつの足」が収まったところで、パンティはもっこりふくらんでしまった。

と、まわりこんできたアビーが、それを下にたたみ込むのだと教えてくれ

た。

さっきより勃起の度合いが弱まっているのにほっとしながら、僕はそれをぐっと押し下げ、股の間に挟んだ。

すると、そこで、アビーが僕のお尻に手をかけてきた。

「な、何するんですか！」

僕は、焦って飛びすさっていた。

「動かないで」

彼女はさらに「じっとしててね」と言い、パンティの生地をお尻の肉の上に広げるようにしてから、上の部分を持ち、ウエストあたりまで引き上げた。

その生地が、僕のヒップを包み込み持ち上げた。その感触は、ちょっと心地よかった。

このあと起こったひとつひとつのことを、僕は死ぬまで忘れないだろう。

鏡の前に立った僕は、そこに映る僕自身を見つめていた。

この段階ではまだ、単に、ブルーのパンティをはいた男にしか見えなかった。

次に、鏡を見たまま椅子に腰掛け、パンティストッキングをはいた。毛を剃った脚の上を滑るナイロンは、かすかに静電気のちくちくする感じを肌に残したが、そこには、それ以上の言いしれぬ感触があった。

アビーは、僕を鏡に向かせたまま、ブラジャーをあて、ホックをとめ、ストラップに両腕を通させた。

僕は、なんだか、幻覚を見ているような気がした。鏡の中のその薄い下着は、まるで僕のあばら骨にからみき絞めつけてくる蛇のようだ。その色が濃い赤だったことも、よけいに危険な感覚を抱かせた。しかし、同時に僕は、その感触に、なんだか抱きしめられているような思いも抱いていた。

僕はふたたび、鏡の中の全体像を眺めてみた。その姿は、まるでスイッチを切り替えるように、二つの極の間を揺れていた。完全な男でもなく、完全な女でもなく、男であり、女であり、男で、女で……。

「ハニー、ちょっと前屈みになってくれる？」

鏡の中の姿に気を取られていた僕は、その声に一瞬びくりとした。

と、アビーは、笑いながらつづけた。「そんなに驚くことじゃないでしょ。あなたにはリアルなふくらみはないんだから、ブレストフォームは必要よ。Aカップで、小さめの乳首だとしてもね。今日のところは、予算のことも考えて、ウレタン製のパッドにしとくけど」

そのパッドをブラジャーのカップに入れたあと、アビーは僕を立たせ、い

ったんまた、ローブを羽織らせた。そして、僕の頭にスカーフをかぶせ、バンダナのように結んだ。

「美容サロンに行くまでにも、さらすわけだから、パスするためには、これが必要よ」

「さらす？」

僕がきくと、アビーはその言葉を「人目に触れる」と言い直した。

僕は愕然とした。

僕にはまだ、女の格好で街中に出るつもりなどなかったのだ。

もちろん、このままいけば、いずれはそんな時もあるのだろう。でも、それはずっと先だと思っていた。たとえば、ロバートはよくパーティに招かれるし、出張も多い。そんな時、ひとり部屋に隠れて暮らすわけにはいかないのだろうから。でも……。

「だいじょうぶよ、ハニー。たしかに

中には、嫌らしい視線を向けるやつもいるけど、たいていの人には、そんなにじろじろ見たりしないから」

そう言うと、アビーは、ハンガースタンドに吊された何着もの服を手で送り、物色しはじめた。

「さあ、じゃあ服ね。ちょっと急がなきゃいけないわね。美容室の予約まで1時間ちょっとなんでしょ。ここから『ベッカの店』までは5分もかからないけど、それはつまり、あなたが女らしさを身につけるのに1時間しかないってことよ。声はまあ、それなりに高いけど、もっと、女らしいしゃべり方の練習もしたかなきゃね。……そうね、こんなのが似合いそう。これ、着てみて」

アビーが差し出した「これ」を見て、僕は思わず笑い出していた。

「いくらなんでも、これはないでしょ。」



こんなイケイケの服」

「そのとおりよ」

アビーは平然と言った。

「さっき、私が、ちょっと不良っぽい女の子って言ったのは、こういう意味よ。その方が、かえって男っぽさを隠せるの。これなら、もし男が出ちゃった時も、人は、それをあなたのはすっぱな部分だって思ってくれるわ。いいから、ハニー、とにかく着てみてよ」

仕方なくそのワンピースを受け取った僕は、それを頭からかぶった。背中のジッパーと格闘しながら、やっとのことで上げ、そして鏡を見た。

僕は思わず、よろめきそうになった。

頭からかぶったせいで、スカーフはくしゃくしゃになってずれていたし、化粧気のまるでない顔も服とちぐはぐだ。にもかかわらず、その姿は女に見えるのだ。

美人とは言えないまでも、けっしてブスじゃない。言ってみれば、彼女は、タフでデンジャラスな女だった。

彼女の服は、右肩より左肩が落ち、その開いたネックラインから、ブラの赤いストラップがのぞいていた。裾もまた、アンシンメトリーに斜めカットされている。生地は黒だが、左胸のふくらみあたりに、銀色の三日月が刺繍されていた。

僕は、以前、どこかのパーティで彼女を見かけた気さえした。で、僕は、彼女と話したいと願いながらも、ナンパの相手としては手強すぎると怖じ気づき、すごすご引き下がった……とでもいうような。

「なるほど、これなら、うまくいくかもしれない……わ」

僕は、アビーに向かって、つぶやいていた。

「ロバートの好みかどうかはべつにしてください、これなら、女の子になれそう」

「そうね」

アビーは、それに答えて言った。「自分の姿に自信さえ持てれば、女は、勝ったも同然よ」

それから僕は、アビーが選んでくれた厚底の黒い靴で部屋中を歩き回り、何度も立ったり座ったりし、落ちているものを拾ってそれを棚にのせるような練習もした。

そのあと、アビーとローレンスを相手に、しゃべり方の練習もさせられた。

そこで僕は根をあげ、椅子にもたれかかり、ちょっと男に戻って言った。

「ふーっ、女ってのは、なんて大変なんだ」

「まだ始まったばかりでしょ、ハニー。お代は、約束どおり300ドルでいいわ。」

大出血サービスよ。これからも、いいお客さんになってもらいたいからね。

『ベッカの店』は、ここを出て、右へ2ブロック行ったところ。おどおどしないで歩いて。髪が見えないようにスカーフさえしてれば、2ブロックなら、誰にも気づかれないわ。これからは、ジーンズなんてやめて、もっと服を買ってね。やっぱり、細身の黒が、あなたには似合うと思うわ。もちろん、今持っているTシャツとかも、ほとんど使えないはずよ」

人々の軽蔑や悲鳴が待っているかもしれない場所に向かって、僕はおそるおそる店を出た。

でも、ベッカの店に着くまで、そんなことは一度も起こらなかった。

で、わかったことは、ここが、マンハッタンのイースト・ビレッジだとい

うことだ。多少変わったやつだと思われたかもしれないが、どうやら僕は、この街の基準からはずれてはいないようだった。

「ベッカの店」は、どこにでもあるヘアサロンと、何ら変わらないように見えた。もつとも僕は、そんな店の前を通るだけで、これまで一度も入ったことはないのだが。

ドアを開け中に入ると、どこかから、甲高いブザーのような音がした。いや、背の低い、東洋人の女性が一人、こちらを見上げ声をかけてきたのだ。

「テリー？」

僕がうなずくと、ブザーの音はさらに続いた。

「OK、その服、いいわ。ステキよ。ハイ、私がベッカ。今、アビーが電話をくれたわ。緊張なんて、しなくて

いいのよ。全部、私に任せて。じゃあ、ここに座って……」

そんなおしゃべりが1分間くらいつづいたところで、彼女はやっと、僕の頭からスカーフをとった。

「あらまあ、やらなきやいけないことは、たくさんありそうね。どんなふうにする？ 髪の色は、今のまま、黒でいい？」

一瞬考えたけれど、けっきょく僕は、さっきアビーと決めた目指すべきキャラを伝えた。実際、どうすればいいかなんて、僕にはわからなかったのだ。

そして、あとはすべてを彼女に託し、目を閉じた。と、すぐに、はさみの音が聞こえ始めた。

「ちょっとだけ、茶髪気味にしとくわね。いいでしょ？」

長い時間のあと、やっとその作業は

終わり、僕は目を開けて鏡を見た。

前髪は、ちょうど眉のあたりで、すき気味にそろえられていた。バックは、襟のあたりまでのレイヤーカットで、一筋だけ、それよりちょっと長い髪束が、ビーズを編み込んで垂れていた。

僕がにっこり笑いながらうなずくと、ベッカも鏡越しに目を合わせ、言った。

「ちょっと、メイクもしとくわね、テリー」

なんだか、現実とは思えない感覚の中で見ていると、ベッカは、一本の口紅を自分の手の甲に塗って確かめたあと、その茶色っぽい赤を、僕の唇にのせていった。

「このくらいだったら、見てれば、次から自分でもできるでしょ」

口紅がすむと、ベッカは、アイシャドーを入れ、チークも少し入れてくれ

た。

「爪は、どうする？ 赤？ 黒？ 茶色？」

「今日のところは、このままでいい…  
…わ」

ほんとは、やってもらった方がよかったのかもしれない。でも、僕はまだ、マニキュアに輝く指を使いこなせる自信がなかった。

そこで、僕は立ち上がり、鏡を見た。

いつものウエストポーチはちぐはぐだし、ワンピースとかんたんなメイクだけで、僕の特徴が隠されたわけではない。その下にいるのが僕自身であることも、はっきりとわかった。それなのに……それにもかかわらず、その姿は女のように見えた。

より正確に言うなら、こうして鏡に映っている以上、自分は女なのだと思うのだ。



代金の高さにあ然としながら支払いをすませ、ベッカに礼を言った僕は、家路についた。

途中、ちらちらこちらに向けられる視線は感じたが、僕の見る限り、それは、正体を見破られているということではなく、「ごつい女だな」という程度のものだった。

地下鉄の中で、ビジネススーツを着た僕と同じ年くらいの女性が、僕の姿を上から下まで見たあと笑いかけてきた。一瞬びくりとしたのだが、要するにそれは、自分が降りるので、席を譲ってくれるということだったようだ。

アパートの階段を昇っていくと、股下で、パンストの生地がこすれ合った。その感触のせいで、僕のペニスは次第にむずむずしてきたが、とりあえず、

パンティとパンストが押しえ込んでいた。僕は、それに、ちょっといらいらしながらも、一方でエロティックな気分にもなっていた。

やっと部屋に着き、鍵を差し込んでドアを開けた。そして、いったん中に入りショッピングバッグをそこに置くと、僕はすぐに、アンネとピーターの部屋に向かい、呼び鈴を押した。

## 第4章

### 僕のために彼がしてくれたこと

ドアを開けたアンネは、そこで、驚いたように僕を見つめた。

「……えっ？ う……うそお。……あ、入って、テリー……よね？」

中に入った僕は、まだこちらをポカンと見ているアンネに顔を向けたまま、ドアを閉めた。

「そう……よ、ぼ……あたし。どう？ おかしくない……かしら？ ロバートは、気に入ってくれると思う？」

アンネは、僕の口調にも驚いたようだったが、僕を部屋の真ん中へと引き入れた。

「そこに立って、よく見せて。……ワオ！ これだけ近くで見ても、まるで女。これなら、誰に見られても、パスできるわ」

それからちよつとの間、アンネは、僕のまわりを回るようにして、こちらを見てきた。

「私、ロバートと会ったのは一度きりよ。覚えてるでしょ。だから、彼が気に入るかどうかは、よくわからないわ。でも、これなら、少なくとも、笑われたり、いやがられたりはしないと思う」

彼女はさらに、僕の頭から足先まで目を走らせ、つづけた。

「それにしても、まさかあなたが、マンハッタンのクラブへ行くような服を選ぶとはね。でも、ほんとによく似合ってる」

その言葉に、僕はちよつと安心しながらも言った。

「だけど、やり過ぎじゃない……かしら？ 最初は、こんな、あばずれっぽくするつもりなんて、なかった……のよ。でも、なりゆき上、こうなっちゃ

って」

と、アンネは僕に近づき、ハグしてきた。

「ううん、あばずれになんて見えないわ。すてきよ」

そのあと、アンネはビールを出してきて、僕は、彼女とともにソファに座り、今日一日の出来事を話した。

その話を聞きながら、アンネは時折、僕のした経験を解説してくれたり、さらに深い内容を教えてくれたりした。それを書き留めようと、ポーチから電子手帳を出した僕を見て、彼女は笑った。

でも、そのおかげで、ピーターが帰ってくるまでに、僕の電子手帳にはこんなメモが並んだ——

「アイライナー？ くすんだグリーン」

「ブラ、ローカットでなくワイヤーの

入っていないもの」「よそ行きの服なら  
J-ボニータ」「いつも女性の必需品  
(ん?)を携帯すれば、よりリアルに見える」「イヤリングはパーカー宝石店」  
……

話している途中、携帯電話が鳴った。  
ロバートからだった。

彼が自分がどれほど幸せ者かを語っているうちに、僕はちょっと考え、今夜は僕の部屋で夕食をとろうと提案した。彼も賛成し、仕事がちょっと長引きそうだけれど7時には行けるだろうと言った。

そうこうするうちに、ドアが開き、ピーターが帰宅した。

近づいてきてアンネのほっぺたにキスしたあと、彼は、こちらをいぶかしげに見た。そこにいる人物が、初対面のくせに挨拶もせず、いやにくつろいだ様子なのが不思議だったのだろう。

しばらくにはらむようにこちらを見た末、そこで、驚きに目を見張った。

「……えーっ！ テリー？ うそだろお。マジかよ。ワオ！ ちょっと立って見せてくれよ」

僕が立ち上がると、ピーターは、全身に目を走らせたあと、ゆっくりと首を振った。

「マジかよ。うそだろ」

自分の分のビールをとり、冷蔵庫に向かいながら、またそう繰り返した。

でも、そのあと、なぜか僕らの会話はぎくしゃくしたものになった。話している間、ピーターは、僕の体を何度も上から下まで見て、首を振ったりした。どうやって、こんなに早く女物の服を手に入れたのだというような質問もしてきた。

数分後、僕は、留守電のチェックをしたいし、かたづけなければならない

仕事があるからと言い訳し、席を立った。

部屋に戻ると、壁越しに、アンネとピーターの声が聞こえてきた。話の内容はよくわからなかったが、どうもそれは、何かを言い争っているようだった。

僕は、ちょっと不安になった。その論争のきっかけが、自分でなければよいがと思った。

僕が出て行ったあと、ピーターが僕を馬鹿にするようなことを言い、それをアンネがとがめた？ それとも、ピーターが僕の方ばかりを見ていたことに、アンネがやきもちをやいた？

二人とも僕にとってはいい友達だから、責任を感じるが、だからといって、僕に何ができるわけでもないだろう。

そんなことを思っているうちに、や



がて、その声は聞こえなくなった。

そこで僕は、ベッドの上に、ショッピングバッグの中のものを出してみた。

ライトブルーのブラジャー、白いレース(アビーによれば「シェープアップ・レース」)のパンティ、パンティストッキング、それに、ベッカの店で買った口紅とほお紅。

あとは、いま身につけているものと、それに、昨夜のパンツ、ブラウス、ローファー。これが、現在僕が持っている女装用品のすべてだ。

もちろん、これまで僕が着ていた服、たとえば若干のジーンズやTシャツ、それにグレーのとライトブルーのジャージあたりは、これからも使えるかもしれない。それにしても、まだ足りない。多くの服を買わなければならないのは明らかだった。

とりあえず僕は、そのためのリストをつくることにした。

ところが、そう思ってコンピュータの前に座ったところで、いったい何が必要で、それがいくらくらいするものなのか、僕にはまったく知識がないことに気づき、手を止めた。ちなみに、このリストが完成するまでにはその後2週間を要し、総予算は少な目に見積もっても1700ドルほどかかることがわかった。まあ、一挙にすべてをそろえる必要がなかったことは、救いだっただ。

ともかく、「パンティ」「パジャマ」「ブラ」あたりのアイテムを打ち込んだところで行きづまってしまった僕は、そこで、ぼんやりと部屋の中を見渡した。

そして今度は、もし、僕とロバートが同居するようなことになったとした

ら、そのためにすり合わせなければならぬのは、なにもセックスのことだけではないのだと気がついた。

ロバートの部屋のインテリアは、入居と同時に家具屋に見取り図を渡し「この部屋に合わせたセンスのいい家具をそろえてくれ」とでも言ったように見える。

それに対し、僕の部屋は、買い足してきた中古の家具や器具ばかりで、当然、色やセンスはバラバラ。唯一新しいのは、コンピュータまわりの仕事机や椅子くらいだ。コーヒーテーブルはアジア風だし、アームチェアはもともと中東からの輸入品だったらしい。パトリックから買ったトースターはライムグリーンで、コップのセットにはヤンキーズの選手がプリントされている。そんな統一感のなさの中で、こぎれいに、かつ使いやすくかたづいてい

ることだけが最大の取り柄だ。

一方、ロバートの方は、ルームクリーニングの会社と契約して1週間に1度クリーニングチームに来てもらっているというのに、その部屋は、いつ行っても雑誌が散乱し、使ったコップが放置され、テーブルの下には脱いだままのスニーカーが放り出されている。

もしいつか、僕が引っ越し、いっしょに暮らし始めたとしたら、潔癖性ではないがきれい好きな僕と、センスはいいがだらしないロバートとの間には、さまざまな問題が起こりそうな気がした。

そんなあれこれを考えることに疲れを感じた僕は、シャワーを浴びようと思い、ワンピースやパンストを脱いだ。

バスルームの鏡の前でブラをとり、ウレタンのパッドをカウンターに置い

てから、あらためて自分の姿を見てみた。

その胸にさえ目をやらなければ、口紅とほお紅とアイシャドーの顔は、まだじゅうぶん女に見えた。美人ではないにしても、ある程度は男の関心を引けそうな気がする。そして、女たちの好意も。まあそれが、多分に同情的なものだったとしても。

顔と体を洗い終わり、バスローブを羽織ったところで、手が止まった。

いつも使っているそのブルーのバスローブは、すり切れて、あまりにもみすぼらしい気がした。

それで、部屋に戻った僕は、立ったまま、コンピューター上のリストに「ローブ」と書き加えた。

そこで、ついでにインターネットのオンラインカタログでも見て、今後必要になるものやその値段を調べてみよ

うと思った。写真を見れば、流行のスタイルや着こなしの勉強にもなるにちがいない。

それで、椅子に腰を落とした僕は、ふと下を見て、笑ってしまった。バスローブの前が大きくはだけ、開いた脚がのぞいていたのだ。

男としてはこれでいいとしても、今の僕には許されないだろう。

僕は、膝を合わせて座り直し、足先もぴったりとそろえた。

学ばなければならぬことが多いだけでなく、捨てなければならぬ習慣も多そうだ。26年の間に身についた立ち方、座り方、話し方、そのすべてをいったんご破算にして、新たに学び直す。僕がやろうとしているのは、そういうことなのだ。それが身につくまでには、我慢しなければならぬこともいろいろあるに違いない。

僕は、インターネットで検索し、女装やトランスジェンダーを専門に扱ったサイトでためになりそうな記事を読み、マーシーズのような大手百貨店のカタログもあれこれ調べた。

それに夢中になっていたせいで、時間がたつのを忘れていたようだ。気がつくと、時計は6時42分を指していた。

「あ、やばい」

僕は、あわてて立ち上がった。

もうすぐロバートが来るのだ。このままでは、すり切れたバスローブで彼を迎えることになってしまう。

バスルームに飛び込み、手早くブラをつけ、カップの中に例のパッドを入れる。

「ハロー、あたし」

鏡の中の自分にそう呼びかけたあと、また外に飛び出した僕は、今度はゆっくりと——でんせんしないように

——パンストをはいた。

僕は、大学時代、3人の女の子とつきあった経験がある。だから、こんな時、女の子がどうするかはだいたいわかる。

急いでワンピースをかぶり、それをおろしながら、もう一度バスルームに駆け込むと、メイクに取りかかった。

納得できる仕上がりになるまで、口紅を三度塗り直した。口紅といっしょにベッカのところで買ったほお紅もさした。しかし、僕はまだ、アイシャドウを持っていなかった。

でも、鏡をのぞくと、先刻顔を洗ったにもかかわらず、目のまわりにその痕跡がけっこう残っていた。(僕がクレンジングクリームというものを知ったのは、もう少し後だ。)

それで、ブラシでヘアスタイルを整え、メイクを終えた。



例の「イエスタデイズ」で買った黒い靴を履き、腰掛けて(もちろん脚をそろえて)ロバートの到着を待つことにした。

そこまでの準備を、僕は7時3分までに完了していた。そして、ドアがロックされたのは7時8分だった。ロバートは、ビジネス以外のプライベートでは10分以上遅れるのがふつうだったから、これは、彼の気持ちは早っている証拠だ。

立ち上がった僕は、ひとつ大きな深呼吸をしてからドアに近づき、そこを開けた。そして、一歩しりぞき、ほほえんでみせた。

とはいえ、僕は内心びくびくしていた。ロバートの顔に嫌悪の表情が浮かぶのではないか、それとも、大笑いされるのではないかと、それを恐れている

た。

ロバートは、そこに突っ立ったまま、しばらく僕をじっと見つめていた。その顔に、最初に浮かんだのは、驚きだった。そして、次の瞬間、ロバートの顔によぎったものに、僕は、予期していたのとはまったくちがう恐れを感じた。それは、性欲と言っているものだったからだ。

それにおたおたしているうちに、入ってきたロバートは足でドアを閉めながら、僕の腕に手を伸ばし抱き寄せた。

さらに驚いた僕は一瞬体を固くしたが、気づいて、その体を突き放そうとした。でも、そこで、彼の唇が僕の唇をとらえ、その瞬間、僕の力は萎えていた。

唇のまわりの肌に、ひげの剃りあとのちくちくする感触が伝わり、鼻腔には、アフターシェーブローションのか

すかな匂いが忍び込んできた。驚いたことに、僕はそれを、いやだと感じていなかった。

いつしか僕の手は彼の背中にまわり、その体を抱きしめ返していた。けっきょく僕らは、部屋の入り口に立ったまま、1分以上、抱きしめ合っていた。

やっとのことで唇を離すと、ロバートは、僕の背中に手をかけ、部屋の真ん中へと導いた。そして、少し離れて、あらためて僕の全身を見た。

「あー、テリー……」

彼は、声をかすれさせながらつぶやいた。

「なんて言ったら……いいのか……」

そのあげく、言葉をとぎれさせた。

「ロバート、これで、いい？」

僕がきくと、彼はまるであえぐようにつづけた。

「ああ、テリー……、君こそ僕の……  
夢の……女だ」

そして、駆け寄るように近づくと、  
ふたたびキスしてきた。

でも、今度のキスは、先刻のものとは  
ちょっとちがっていた。ロバートの  
舌の先が、僕の唇の上を探るように這  
ったのだ。

それに気づいた瞬間、嫌悪の波に襲  
われ、僕は唇をぎゅっと閉じていた。

もちろん僕だって、かつての恋人た  
ちとディープキスの経験くらいある。  
中でもジュリアは、舌を差し込まれた  
ままにしているのが好きで、たびたび  
そんなキスを求めてきた。でも、それ  
とこれとはちがう。今、僕は、まったく  
逆の立場で、それを求められている  
のだ。そんなキスには、耐えられそう  
になかった。

僕は、僕が取りつけている約束を思

い出させようと、深い息を鼻から吐いた。

と、すぐにそれに気づいたらしく、ロバートは焦ったように唇を離し、頭をもたげた。こちらを見つめるその顔に、申し訳なさそうな、そして不安そうな表情が浮かんでいた。

その顔を見返しているうち、僕の心が大きく動いた。

僕は、両手を彼の首にまわし、ぶら下がるようにしてそれを引き寄せていた。彼の唇をもう一度、僕の唇と合わせ、そして僕は、それを開き気味にして待った。

ロバートは、少しの間とまどっていたようだったが、やがてその舌が僕の唇の間を通り抜け、僕自身の舌に触れた。その瞬間、またちよっと嫌悪感が走ったが、それはすぐに消え失せた。僕の舌の上をすべる彼の舌のやさしさ

に、僕は、自分が大切に守られているのだと感じたのだ。

彼の腕は僕を包み込み、僕らは、お互いの体をきつく押しつけ合っていた。

と、唇をほんの少しだけ離し、ロバートが言った。

「テリー、僕が今、どんな気持ちか、わかるかい？ 僕は何ヶ月も、ずっとこんな瞬間を待ってたんだ。それが、どれほど苦しかったか……。だけど、これは……。いや、君は、待つだけの価値のある……。女だった」

そこで僕らは、もう一度さらに深いキスをし、そのあと、ロバートは、どこか緊張した面持ちで言った。

「テリー、僕は今、君のために、あることをしてあげたいと感じてる。信じて、任せてくれるかい？」

次の瞬間、僕の体は宙に浮いていた。

ロバートが、横抱きしたのだ。彼はそのまま、僕をソファまで運んだ。

僕は恐れを感じ、思わず体全体をふるわせていた。ロバートのズボンの前の部分が固く盛り上がっているのは、先刻から感じていた。でも、僕には、そんな心の準備はできていない。

「テリー、だいじょうぶ。僕は、君を傷つけたくはない。君をむりやり犯すなんてことは絶対しないよ。いいね？」

ロバートは、そう言うと、僕のスカートの裾から手を差し入れ、ヒップにまわしてきた。僕の首やあごや目のまわりにまでキスをつづけながら、彼は、その手を、最初は尻の上に這わせ、やがて腿へ、そして、最後には僕のペニスを愛撫しはじめた。股の間に折り曲げられた僕のペニスは、それに応え、パンティやパンストの生地にあらがって立ち上がろうとしていた。そのこと

に、僕自身が驚いた。

そこで、僕が思わず上げてしまった声は、半分はその刺激に反応してのものだが、あと半分は、こんなことはよくないという抗議の悲鳴だった。ロボートの手がパンストとパンティのへりにかかり、そこを引き下げようとしたときにも、僕はまだ、かろうじてそんなバランスを保っていた。

「ロバート、だめ……、待って……」

僕は、あえぎ気味にそうつぶやいた。

しかし、ロバートは、こう繰り返した。

「だいじょぶ、君を傷つけたりしない。テリー、安心して」

彼は、僕の下着を引き下げると、左手でさらに僕を抱き寄せキスしながら、その右手を、僕の裸の腿の上に這わせた。

その腿の間に、僕のペニスがいきり



立ったことで、僕は、自分がさらに興奮していることを知った。

と、ロボートの体がソファを滑り降りた。そして、ひざまずくと、その頭が、僕のそれに向かって下りてきた。

僕はもう26歳だし、かつてつきあっていた女性3人ともベッドをともにし、するべきことはしてきた。そのところはわかってほしい。でも、じつは僕には、「フェラ」してもらった経験はなかったのだ。そんな僕が、その夜のロボートの行為を、はたしてそう呼んでもいいものかどうかは、ためらうところだが。

とにかく彼は、自分の口と手で僕のを愛撫してくれ、その初めての経験に、僕はこらえられないほどの興奮を味わっていた。

最初、彼は、僕の内腿の肉をかじるとでもいうように唇を這わせ、そのあ

と、ペニスのシャフトをなめた。

彼の左手は、僕の体の反対側にまわり、アヌスのあたりをくすぐっていた。でも、けっして、そこに指を突き立てようとはしなかった。右手の方は、僕の腿をもむように動き、時に、僕のボールを持ち上げるようにしたり、シャフトをしごいたりした。

そして、ついにロバートは、僕のすべてを口の中に呑み込み、ゆっくりと頭を上下させ始めた。

そのあと何度か、彼は頭をちょっと上げ、動きを止めた。それは、唇の感触から、僕がイキそうになるの感じ取り、発射までの時間を長引かせるためだったにちがいない。僕の興奮が少しおさまると、彼は、また頭を動かし始めるのだ。

最終的に、そこから唇を離れた彼が、僕の脱いだパンティをその先にあて、

クライマックスに導いたとき、僕は、ソファの上で身もだえながら、声を上げていた。その声は、かろうじてもだえ声という範囲にとどめられたものの、ほとんど悲鳴に近いものだった。

そして、それは終わっていた。

ロバートが身を起こし、僕らはそのあとも、ソファに座って抱き合っていた。ロバートは、まだ僕のペニスに手を添え、次第に萎えていくそれを愛撫しつづけてくれていた。

僕は、自分自身も何かしなければいけないような気がしてきて、彼のズボンの前の固いふくらみに手を伸ばし、そこをなで始めた。しかし、彼の手がその手をつかんで止めた。

「テリー、無理しなくてもいいよ。今夜は、君のための夜なんだから」

その言葉に、僕はふたたびキスをせがみ、僕らはしばらくキスをつづけて

いた。

しかし、そのうち、僕の中に現実感が戻ってきて、心が二つに分裂しはじめた。

今の今まで、僕のペニスが男の口の中にあったのだというその光景がまざまざとよみがえり、僕は急に吐き気に襲われたのだ。

それで、いきなり立ち上がった僕は、バスルームに飛び込んでいた。

実際には吐かなかったものの、便器の上に顔を突き出した僕の食道に、むかむかするものが何度もこみ上げた。

と、ドアの外に、ロバートが近づいてくる足音が聞こえた。それで僕は、あわててバスルームを出た。

「だいじょうぶ？」

ロバートがやさしいまなざしできいてきた。

「うん、ちょっと……」

そのまなざしを見つめながら、僕は言った。

「でも、もう平気……よ。とっても……ステキだったわ」

そして、彼の大きな胸に、身をあずけた。

そのあと僕らは、お互いの体をまさぐりながら、さまざまなことを語り合った。

まだ2つの部屋に住みながら、どうやって二人で過ごす時間をつくるのかということ。

そのためには、地下鉄が、いかにじやまかということ。

彼は、僕にどんな服を着てほしいと思っているのかということ。

そして、僕には、もっと胸らしい胸（本物の乳房でないまでも）が必要だということも。

「ねえ、ロバート」

ちょっと迷ったが、僕は思いきってきいてみた。

「あたしたち、セーフ・セックスについて話しとかななくていいのかな？」

そこで、ちょっと沈黙が流れた。それで、僕は、僕の方から言うべきだと感じた。

「あたしの……っていうか、僕の最後の彼女だったシェリーは、セーフ・セックスにうるさい人だった。だから、ぼ……あたしも、エイズの検査を受けさせられた。もちろん、ずっとコンドームを使ってたしね。だから、あたしの方は、だいじょぶよ」

ロバートは、もうしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「テリー、あの最初にラケットボールをした日の翌日、僕らがいっしょに飲みに行ったことを覚えてるか」

僕がうなずくと、ロバートがつづけた。

「あの日にはもう、僕は、自分が恋に落ちていることに気づいていた。それまで僕は、長い間、自分は一人で生きていくしかないと覚悟していた。だから、恋人もいなかった。でも、君に会って、どんなことをしても、君を僕の恋人にしたいと思ったんだ。そして、君は、そんな僕の願いに応えてくれた。ずっと妄想だと思ってきたことが、本当に実現してしまったんだ。今夜みたいな夜を、これからもずっと送るためなら、僕は、どんな検査だってすぐに受けるさ。それにね、君みたいな人がもう現れるはずはないから、僕は、今後も、他の誰とも恋に落ちることはない。それこそ、僕に病気の心配がないことの、何よりもの保証だろ」

僕らは、そのあともしばらく、抱き

合いながらソファに横になっていた。

「ロバート」

僕は、ふと気づいて言った。

「そういえば、夕飯のこと、すっかり忘れてたわ。ねえ、どこかに食べに行こ」



## 第5章

### ショッピングとお出かけの仕度

それからの数週間は、困惑と喜び、そしてちょっとした心の痛みとともに過ぎていった。

僕は、仕事と買い物の時間をうまくやりくりし、ロバートと会った。その他の時間には、アンネにつきあってもらって女としての練習をしたり、一人の時は、引っ越しのことを考えたり、メイクや着こなしの練習をしたりして過ごした。

僕は、初めて女装したあの日のことを「T-デイ」と呼ぶことに決め、そこから、僕の人生がリスタートしたのだと考えることにした。あの晩のソファの上の出来事は、僕の心の中にずっととどまり、そのことを思い出すたびに、体の中で、なにかが熱く燃え上が

った。

その「T-デイ」の翌朝、僕は、いつものように7時に起き、テレビニュースの天気予報を見た。晴天、気温は58度(訳注 摂氏14度)。走るのにもってこいだ。

ランニングウェアを引っ張り出したところで、僕は、これが、女性としての初めてのジョギングだということに気がついた。

やっぱり、ブラとウレタンパッドを着けるべきだろうか？

僕はとりあえずコンピュータを立ち上げ、例のリストに「スポーツブラ 2」と書き込んだ。

その上で、ブラはやめ、Tシャツの上にジャージの上下を着た。

ウォーミングアップをしたあと、7時25分には部屋を出ていた。

走っている間、何人もの常連のジョガーと顔を合わせたのだが、その中に不審の目を向けてくる人はいなかった。早朝だし、まだ眠い目をこすりながら走っている彼らにとって、僕は、ふつうのジョガーの1人に過ぎなかったようだ。

アパートに戻ったところで、僕は、ロバートに電話した。まずは、前夜の出来事がどれほどすてきだったかについて、じゃれ合うような会話がかった。

それが一段落したところで、僕は、今夜は会えそうにないと伝えた。

その言葉に、ロバートは落ち込んだようだったが、僕は、仕事がたまっていて、今日はそれをまとめてかたづけるともりだと伝えた。

「でも、そっちのお仕事が終わったところで、一度電話してね」とつけ加

えると、彼のご機嫌は、少しなおった。

シャワーと朝食のあと、僕はさっそく仕事にかかった。でも、どうしても集中力がつかない。

色調の調整をするために画面上の写真をにらみつけていると、いつの間にか、ロバートといっしょにどこかにドライブしている自分を夢想していたりする。

そのうち、もしかしたら自分はもともとゲイで、これまでそれに気づかなかっただけなのかもしれないという考えにとらわれ、ふと時計を見ると、半時間が過ぎていたりするのだ。

けっきょくは、しばらく仕事を保留し、他のことをした方がいいと決断した。

それで僕は、服を買うために街に出

た。

向かったのは、「Jーボニータ」という店だ。

アビーが推薦していたし、アンネも名前を挙げていた。でも、その前まで行ったところで、僕は入るのをためらった。完全なレディスの店に入るのは、やはりまだ怖かった。

おずおずと自動ドアをくぐると、その音に気づいたらしいスレンダーなヒスパニック系の女性がこちらに目を向けた。

「いらっしやいませ」

しゃれた服がよく似合う彼女が、僕の全身にさっと目を走らせるのがわかった。

他の下着は替えていたが、ブラはまだ例の赤を着けていた。アウターは、あいかわらず黒のイケイケワンピースで、そこからブラのストラップがのぞ

いている。

「あの……、服を見たいと思って。その、つまり……よそ行きの」

近づいてきた彼女は、どんな感じの服がいいのかとききかけ、そこで急に言葉をとめた。そして、もう一度僕を見たあと、笑いかけながら言った。

「もしかして、『イエスタデイズ・クローゼット』のご紹介でいらしたお客様？」

僕は一瞬びくりとしたが、彼女の微笑みにその意図がわかり、聞き返した。

「やっぱり、わかりますか？」

「いえ、そんなこともないですよ。私だって、気づくのに、少なくとも1分以上はかかったんですもの。たいていのトラニー(※)のお客様は、すぐわかるのに。もう、経験はお長いの？」

(※訳注 トランスジェンダー、トランスベスタイトなどを表す略称)

「いえ、まだ最近始めたばかりです」

僕は正直に答えることにした。

「でも、じつは、あたしにはボーイフレンドがいて、その彼がビジネスマンタイプなんです。外をいっしょに歩いたりする時、こんな服じゃ不釣り合いかなって思って。それで、もう少しちがう服を……、もう少し……その……」

「おしゃれな？」

彼女が助け船を出してくれた。

「はい」

そのあと、彼女は、服の説明をしながら店内を案内してくれ、その途中、心配になった僕は、予算はそんなに多くないことを伝えた。

スカート、ブラウス、そしてワンピースを見てまわり、一周した時には、彼女は、黒のワンピースと、奇妙な形の紺とグリーン服、そして、スカートを一着持っていた。

「まず、黒のから始めましょうか？」

「……え？」

僕がぽかんとして聞き返すと、彼女はほほえみながら言いなおした。

「ほんとに初心者なんですね。試着室に入って、この黒のワンピースを着てください。着終わったら、私に見せてくださいますか？」

僕は、ちょっと緊張しながら、試着室の中に足を踏み入れた。店内の他の客たちが悲鳴を上げるのではないかとひやひやしていたのだ。

着ていたワンピースを脱いで、新しいのを着てみた。

体の線に密着したデザインで、裾の長さはちょうど膝にかかるくらい。スカート部分にはちょっとフレアがかかり広がっている。ネックラインはさほど開いておらず、スクエアなカットだ。肘くらいまでの袖は、何の装飾も



ないシンプルなものだった。

値札を見ると、118ドル95セントとあった。

僕は、その値段に思わず息をのんだ。でも、鏡の中の姿はたしかにいい感じだった。

厚底でごついこの靴ではもちろん合わない気がするが、ふつうの黒のフラット(平靴)を買えばいいだろう。

そう思いながら、試着室を出た。

僕の姿を見た女店員は、ひとつうなずいたあと「後ろも見せてくださいます？ チカ(※)」と言った。

(※訳注 シック ‘chic’ にスペイン語の女性名の語尾 ‘a’ をつけて、呼び名にしている。「オシャレさん」くらいの意味か)

僕が振り向くと、近づいてきた彼女は、肩のあたりをちょっと引っ張って、形を整えた。

「ヒップのボリュームが足りないのは

わかってらっしゃるでしょ。パッド入りのパンティがいますね。でも、もっと必要なのは、いい形のバストかしら」

その言葉に、僕は、Aカップのブレストフォームを注文するつもりだと告げた。

「そうですね、Aか、もう少し大き目でもいいんじゃないかしら。でも、きっと、お値段を見てびっくりなさいますよ。いいおっばいは、お安くはないですから」

僕はそれに、インターネットで目星はつけてあると答え、話題はドレスの方に戻った。

彼女は、この服を着るには、低くてもヒール(ヒールだって!)のある靴を買わなければいけないと教えてくれ、バッグも、そんな戦闘カバンのようなものではなくエレガントなハンドバッ

グを持たなければいけないと言った。そして、パーティなどの時はパールのネックレスが、デートには細いゴールドかシルバーのチェーンが必要だともつけ加えた。

僕は、もう一度、鏡の方を向き直り、「似合ってるかしら？」ときいた。「ええ、もちろん、よくお似合いですよ」

彼女はうなずき、つづけた。「それなら、着まわしのきくベーシックな黒のドレスとして重宝すると思います。いろんなジュエリーを合わせたり、上からかわいいジャケットを羽織ったり、フォーマルにしたくないのなら、ブローチとか、あれこれ着けてみるのもおもしろいですね。お顔つきにもよく似合ってるしやるし。まあ、ボディの方は、さっきも申し上げたように、もう少しメリハリが必要でしょ

うけれど」

次に試したのは、あの奇妙な形の服だった。

でも、試着室の中で数分間格闘したところで、僕は助けを求めて女店員を呼んでいた。

「これ、どうやって着るんですか？」

入ってきた女店員は、服にからまった僕を見て、ちょっとよろめき、壁にもたれかかった。思わず、笑ってしまったようだ。

「……ごめんなさい、笑ったりして。でも、それ以上じたばたすれば、ご自分でご自分の首を絞めてしまいそうだから」

彼女は、その複雑な罫から僕を救い出してくれ、この服は、スカートとスリッパとボディースーツとオーバーブラウスが、一体縫製されているのだと説明してくれた。そして、どこをどう広

げて、どこにどう通したらいいのか、手取り足取り教えてくれた。

女性の手で女物の衣装を着せられているということには、なんだかエロティックな感覚があり、僕は、その興奮に体が反応しているのを隠すため、全力を注がなければならなかった。

着終わったところで鏡を見た。

「いかがですか？ チカ」

それはたしかにすてきな服だった。驚くほどすてきに見えた。

でも僕は、この服は自分が目指している方向に合わないと結論づけ、買わないことにした。まあ、要するに、この服の259ドル96セントという値段が、僕が予定していた予算をはるかにオーバーしていたということではある。

次のスカートは、白い細身のシルエットに黒の模様が配されているもので、これは気に入り、買うことにした。

けっきょく僕は、店を出るまでに、最初の黒のワンピースとこのスカート、それに、黒のシェルトップ、黒のスリッパ、鳥の柄のTシャツ、白地に黒い飾りのブラウス、そして、緑と赤と青が配されたブラウスを購入していた。最後のは、女店員に黒いズボンやすてきなジーンズにぴったりと言われ、追加したものだ。代金は全部で280ドルくらいになった。そこで彼女は、靴屋への道順を教えてくれ、今日買った服に似合う靴について細かく指示してくれた。

でも僕は、荷物も多かったし、とりあえずアパートに戻ることにした。

ショッピングバックを揺らしながら、歩道を行くと、心が浮き立つような気がした。明るい太陽が降り注ぐ気持ちのいい日だった。

ところが、急に背後から違和感を感じ、僕は振り向いた。と、そこに、にやにや笑いながらこちらを見ている二人組の男たちがいた。

「よお、オカマちゃんだろ」

一人が、キスするような音を立てながら言った。

「俺たちとつきあわねえか」

僕は腹立ちとおびえに一瞬立ちすくんだが、すぐにきびすを返し、足早に逃げ出した。幸い、男たちは追ってこなかったが、背後からは、笑い声と下卑たからかいが聞こえた。さらに、ソーダの缶が飛んできて僕の頭をかすめた。中身のソーダが降りかかった。

僕はさらに足を速め、それ以上ひどい目に遭う前に、なんとかアパートにたどりついた。

部屋に飛び込むと、急いでドアの鍵

をかけ、荒い呼吸をしながらそこにもたれかかった。

そのあと、悪態をつきながら、もたえるようにして服を脱ぎ捨て、窓辺に腰掛けた。でも、そこで、まだ赤いブラを着けたままなのに気づき、あわてて上からローブを羽織った。

一瞬、ロバートに電話しようかと思ったが、でもこれは、自分自身で乗り越えなければいけない問題だと思い、やめておいた。話すにしても、もっと気持ちが落ち着いてからの方がいい。

少したったところで、僕は立ち上がり、コーヒーメーカーのスイッチを入れた。

すぐに仕事に戻らなければならない。でも、その前にひとつ、しておきたいことがあった。

コンピューターの前に座った僕は、例のリストを開いた。



すでに僕は、いくつかの女装用品の通販サイトを調べ、その中から「エレガント・トランスフォーメーション」というブレストフォームに目星をつけていた。あの店員も言っていたように、もっといいおっぱいを手に入れるつもりでいた。リストに、そのURLがメモしてあるのだ。

オンラインショッピングは、落ち込んでいた僕の気持ちを晴らしてくれた。

もちろん、サイトそのものは、人を笑わそうと思ってつくっているのではないのだろうが、そこには、思いがけないユーモアが潜んでいたりするものだ。

そのサイトで、僕が気に入っていたブレストフォームをクリックすると、画面には「このモデルは、販売を終了しました」という文字が現れた。

僕は思わず、技術の進歩に合わせ、年ごとにおっぱいがモデルチェンジしていく図を想像していた。

「去年はフィンつきデュアル排気型が大流行でしたが、今年は、CDチェンジャー搭載が主流になりそう」

自分自身のユーモアに元気づけられた僕は、代わりに「適度に立っている乳首」を持つというブレストフォームをオーダーした。他にも、パンティに似たガフという下着2枚も注文した。1枚は白地に黒の刺繍のあるもの。もうひとつは、やはり白地にレースがつき赤い刺繍が施してあるものだ。

総額、郵送料込みで256ドル……ふう！

うち、ブレストフォームは185ドルだった。でも、これは高級品じゃない。ブレストフォームのラインナップには、350ドルのものもあったのだ。こ

れなど、僕にとっては、「6連装CDチェンジャー搭載」といったところだろう。

それから僕は仕事に取りかかり、5時間の間、コーヒーをすすり、果物やクラッカーを食べながらも、それに没頭した。気づいて時計を見ると、すでに夕食を買いに行かなければならない時刻だった。

今日、僕はすでに350ドル分の仕事を終えていた。あと予定としては、45ドルの見積もりを出しているちょっとした写真修正が残っているだけだ。

仕事に精を出したおかげで、あのいやな出来事も、すでに過去のこととして気にならなくなっていた。それで僕は、ふたたび外出しようと思った。

その前にまず、さっき脱いだままのパンストとワンピースをかたづけよう

と拾い上げたところで、僕はちょっと考え込んだ。これらをどう洗濯したらいいのか、迷ったのだ。いつも着ているシャツのように、コインランドリーに持って行くというわけにもいかないだろう。

それで僕は、バスルームに入り、水をためたシンクの中に洗剤を入れ、昨日からそこに置いてあったパンティとともに洗った。

バスルームの中にパンティを干しているとき、僕は、昨夜のことを思い出していた。すると、驚いたことに、股の間のものがむくむくと首をもたげはじめ、体が火照ってくるのを感じた。

たまらなくなってきた僕は、キッチンの椅子に座り、頭の中で前夜のイメージを再生しながら、僕自身をしごいていた。

ブラの下に差し入れた左手で乳首を

もてあそびながら、右手で勃起たペニスを握り、激しく上下に動かした。

僕は、ロバートの唇がほおの上を這い、首筋を軽く噛んだ感触を思い起こし、声を上げていた。

ついに我慢できなくなった僕は、そこにあったキッチンタオルをつかみ、その中でオルガスムスを迎えた。

そのあとしばらく椅子の背もたれに体を預けていた僕は、思わずくすくす笑っていた。このことを、ロバートに報告したものでかどうか、それを考えたからだ。

立ち上がった僕は、買い物に行くのに何を着ていったらいいのか、考えた。

夕方の外気は、そうとう冷えてきたようだ。厚手のものを着たほうがいい。

そう思いながら、クローゼットを物色した僕は、きつめのブラックジーン

ズと、前の部分に「ブレイヤー・ホイール」というバンド名がプリントされた黒のTシャツを引っ張り出した。

その上から、赤のスエット・ブルゾンを羽織る。

ヤンキーズ・ハット(※)を取り出し、より女っぽく見えるように、そこにブローチを飾った。このブローチは、以前の彼女が置き忘れ、そのままになっていたものだ。

(※訳注 野球帽‘cap’ではなく、野球見物用に売っているヤンキーズのロゴが入った白い丸帽 ゴルフ帽のような形 男女兼用)

これに、スニーカーをはけば、なんとかなるだろう。

僕は、口紅を塗り直し、プリントしておいた買い物リストを手を取った。

廊下に出たところで、そろそろアンネが勤め先の専門学校から帰っている

時間だと思い、彼女たちの部屋の呼び鈴を押した。

やはり、アンネがドアを開けた。

「ねえ、アンネ。これからA&P(※)に行こうと思うんだけど、なにか買ってきてほしいもの、ある？」

(※訳注 アメリカの大手スーパーマーケットチェーン)

と、アンネはちょっと考えてから言った。

「ピーターはまだ帰ってこないと思うから、私もいっしょに行くわ。ちょっと待ってて」

それで、僕らは二人連れで出かけることになった。

途中、僕はアンネに、今日受けたセクハラ(?)の話をした。その他にも僕らは、服の話や男の話(えっ?)で盛り上がった。話題がショッピングに移ったところで、僕は、思い出し、言った。

「ねえ、あたし、イヤリングを買いたいんだけど。それに、靴も。ほんと、時間がいくらあっても足りないわ、女の子って」

すると、アンネはあきれたように僕を見た。

「おだまり。まだ、なったばっかりのくせに。焦らないで、もう少しゆっくりやったら。靴は逃げないんだから。でも、耳にピアスをあけるなら、あそこの店でやってくれるわよ」

「えっ、ピアス？」

僕は、驚いて聞き返した。

「そうよ。ピアス用のイヤリングの方が種類が多いんだから、あけといた方がずっと選択の幅が広がるわ。やっちゃいなさい。いわば、女の子の通過儀礼よ」

その店は、バツタ屋に近い女性向けディスカウントショップだったが、ピ



アスをあけてイヤリングを一組買うと、もう一組オマケしてくれるというのをウリにしていた。

僕はけっきょくこの店で、ピアスをあけ(思ったほど痛くなかった)、クレンジングクリームとピアス用イヤリング、ちょっと高価なゴールドのネックレスを買っていた。黒いビーズでアレンジされているものだ。

ちょうど仕事帰りの人が寄る時間帯でもあり、A&Pの食料品や日用雑貨の売り場は、いつもどおり混んでいた。そんな中で、一度か二度、疑いの視線が向けられるのを感じた。やはり、その程度には、ばれているのだろう。

買い物はリストどおりに順調に進んでいたが、その途中、僕は、リストに書き忘れていた物があるのに気がついた。

「アンネ、これ以外に買いたい物があるんだけど」

「ええ、何？」

僕は、もごもごと口を開いた。

「う、うん。化粧品類は、これからここで買うとして……、もうひとつ……」

そこで口ごもり、ちょっと考えてから、かつてジュリアがやはり、こう呼んでいたのを思い出し、言った。

「女の子の……必需品」

アンネは驚いたように僕を見たが、すぐに右の方向へ歩き出しながら言った。

「でも、どうして？」

「電子手帳に、この前、あなたから聞いたことがメモしてあるんだけど、ハンドバッグを買えって言ったあとに、よりリアルに見せるために、その中に入れておく物のこと、教えてくれなかった？」

「あたしは、主には化粧品のつもりで言ったんだけど……、ま、いいか」

アンネは肩をすくめ、僕を女性用品専門コーナーへと連れこんだ。

フェミテックス・タンポン1箱、軽い日用のナプキン1袋。僕は、心臓の鼓動と、顔が火照る感覚とともに、それらをかごの中に入れた。

メイク用品のコーナーで、アンネは、アイシャドーや口紅、化粧落とし用のパフコットンを選ぶのを手伝ってくれた。それに、パンストやハイソックス選びにもつきあってくれた。

レジカウンターで、トマト、パン、ジュース、肉などに混じって、女性用品が精算されるたびに、僕は緊張したのだが、レジ係の女性は、他のレジ仲間同様、ただ口の中でなにかをつぶやくだけで、僕の顔を見るようなこともなかった。

アパートに帰り着くと、アンネは、自分の分の食料品を部屋に置いたあと、僕の部屋にやってきた。

彼女は、コンピュータのディスプレイをのぞき、僕が作業中の写真に見入ったりしていたが、やがて、ドアが開いたままになっているバスルームの方に目をやった。

「……ワオ、あなたって、もう、完璧になりきってるのね」

何のことを言われたのかわからず、僕は首をかしげながら見やった。

「だって、下着を洗面台で洗って、カーテンレールに干すなんて、未婚の女の子そのものじゃない。でも、ロバートが来る前には、ちゃんとはずしとかなきゃダメよ」

僕は、二人分のワインを注ぎ、それからしばらくアンネとおしゃべりし

た。でも、その間、僕には、アンネがもっと別の何かを話したがつているような気がしてならなかった。

やがて、アンネの部屋のドアが開く音がした。ピーターが帰ってきたようだ。

「ワイン、おいしかったわ。また、いつかいっしょに、女の子どうしのショッピングに行きましょうね」

アンネは、そう言って帰って行った。

夕食までの時間、僕はまた、今後のことを、あれこれ計画を立てることで費やした。

夕食が終わったところで、ロバートから電話があり、しばらくの間、彼と話し込んだ。

そのあと、残りの仕事をかたづけ、9時半には、お古のトレーナーに着替えてテレビの前に座り、わがヤンキー

ズがシカゴを打ちのめすのを見て、ビールで祝杯を挙げた。

翌日は、朝からハイペースで仕事をこなした。昼頃、ロバートからの電話がかかるまでに、大きな仕事をひとつ仕上げ、それより少し小さいもうひとつも、完成のめどをつけた。他にも、ある不動産パンフレットの見積もりをつくり、送信した。

ロバートとは、彼のマンションで落ち合い、そのあと二人でディナーに出かけることになった。彼が、小さいけれどもいい店だとすすめた近所のインド料理店だ。そんなに立派ではないが居心地は悪くない。そして、ほの暗い照明がすてきなのだそうだ。

僕は、彼の考えていることを察し、苦笑せざる終えなかった。僕が人目からはけっして美人に見えないことを、

彼もよくわかっているのだろう。

僕らは、7時に会うことになった。

しかし、そのためには、僕はまだ、靴とハンドバッグを買わなければいけなかった。

それで、頭の中で計算し、決断を下した。

今日完成したふたつの仕事の代金は、すぐに振り込まれる。現在の預金残高から部屋代を支払い、あと多少のお金を残しておけば、他は全部、服とかに使ってしまっても問題はないはずだ。

もちろん僕は、自分の方からロバートに金銭的援助を頼むのはいやだった。

「ザ・シュー・プレース」は、僕のアパートから歩いて10分のところにあ

った。それで僕は、新しいスカートにTシャツ、その上にセーターを着て出かけた。

歩道に出たところで昨日の男たちのことを思い出し、不安に駆られたが、今日は誰も僕に気をとめたりしなかった。

僕はこれまで、定価販売の靴屋になど入ったことがない。靴を買うときは、ウェブで注文するか、安売り靴を買うかのどちらかだ。だから、こんなちゃんとした店に来て、何を買ったらいいかはもちろん、どのサイズを買ったらいいかもよくわからなかった。(※)

Jーボニータの女店員は、つま先があいた黒のヒールと言っていたが、それはどれだ？

ウェブで注文した経験から、幸い僕は、自分の足のヨーロッパ式のサイズ(※)が42と43の間であることは覚えて



いた。それを手がかりに、棚の靴を見はじめた。

(※訳注 アメリカでは、靴のサイズを「号数」で表し、その区切りも紳士用／婦人用／子供用でそれぞれ異なるため メンズのサイズが、そのままレディースに通用するわけではない ヨーロッパ式のサイズは、日本同様、長さを基準とした男女共通のものが使われる)

ありがたいことに、値段は、手が出ないほどではないようだ。以前、ジュリアが言っていたことから推察すれば、いずれ僕は、僕の足のために、ソックスと同じくらい靴のストックを持つことになるのだろう。

と、どこかから声をかけられ、僕はまわりを見渡した。

「なにか、お探しですか？」

振り向くと、男が一人立っていた。40代後半で、ちょっと太り気味。シャツにつけたキャンペーンバッジには、

こう書かれていた。『いらっしやいませ 私はフィルです 「ザ・シュー・プレース」 サービス会員の入会申し込みは、私に』

「あ、いえ。もう少し見ますから」

僕はそう答え、そのあと、これまで僕が「サンダル」と呼んでいた種類の靴を見ていった。それらは、だいたい1.5インチ(4センチ弱)くらいのヒールがあり、光沢のある黒。細いストラップが足の甲の上にさまざまな形で交差し、そこからつま先がのぞくようになっていた。

「あの、これを履いてみたいんですけど。じつはヨーロッパにいたときのサイズしか知らなくて……。こっちでそれがいくつに当たるのか、わからないんです」

ヨーロッパ式のサイズを言うと、その店員は、棚から8.5というサイズの

ものを取り上げ、僕は椅子に座ってそれを試すことになった。

前にひざまずいた店員が僕の足を持ち上げるようにした時、その視線がスカートの中にちらりと走った。僕はすぐそれに反応し、スカートの両脇を押さえ、膝をぎっゅと閉じてガードしていた。

片方の靴を履かせながら、彼が、ヨーロッパのどこにいたのかときいてきたので、僕はちょっとあせった。

どう答えるか迷ったが、イングランドの北ウンブリアから来たと言ってみた。学生時代に自転車旅行した際、その地方を通ったことがあったからだ。

大きな声にならないように注意し、しかも女性的な抑揚を意識している僕の話し方には、独特のアクセントがある。そんなこともあり、店員は、僕の言葉に納得したようだった。それにし

でも、いちばんの幸運は、たぶん彼には、それがどこなのかわからなかったということだろう。

いよいよ、立ち上がる時が来た。

僕にとって、ヒールなど自然なことではない。立ち上がった僕は、ちょっとの間、そのバランスを確かめながら、どうやったらつまずかずに歩けるかを考えていた。

しかし、とにかく動かなければと思い、頭の中で、これまでに見てきた女性たちの歩き方を思い出しながら、最初の一步を踏み出した。不自然でない程度に小さな歩幅で足を送る。ひんぱんに下を向くのは、あたかもその靴が気に入っているからという表情でごまかす。

そんなふうにして、僕は数歩前進し、そこで向きを変え、数歩戻り、スカートの後ろ側に手を添え、椅子に座った。

そして、僕は言った。

「これを、いただくわ」

僕は、その、黒の「オープン・トー」とともに、二足のドレスリーなフラットを買った。ひとつは黒、そしてもうひとつは「ボーン」という色の物だ。もともと、僕はこれまで、その色をオフ・ホワイトと言っていたのだが。

他にも、中くらいのサイズで黒の、布バッグと革バッグを買った。

支払い総額165ドル。さっきのみじめな歩き方をごまかすため、ついつい、店員のおすすめに従ってしまったせいではあった。

アパートに戻り、僕は例のサンダルを履いて歩き方を練習した。途中、それを履いたままで、かかってきた電話に答え、何件かの集金を支払い、今朝、

最後にやった仕事の出来をもう一度確かめたりした。

4時になったところで、僕は、昨日と同じジーンズと、ロックバンドのTシャツと、スエットブルゾンに着替え、ベレー帽をかぶって、郵便局に小包を出しに出かけた。

郵便局を出て、1ブロックほど歩いたときだった。

僕はまた、後ろから声をかけられた。「よう、ねえちゃん。男が欲しくてたまんねえんだろ。どうだ、俺たちと一発……ウツ！」

下卑た言葉の後につづいたパンチの音とうめき声に、あわてて振り向くと、一人の女性が身構えて立っていた。どうやら、その女性が、僕に声をかけた男を殴り倒したようだ。男は腹を押さえうずくまっていたが、その男には、

まだ二人、仲間がいた。

うち一人は、今まさに、女性に向かってパンチを繰り出そうとしていた。そして、あと一人は、まだ僕の方に目を向けていた。

仕返しすべき時だった。この間の緊張から、僕の野生が解き放たれた。僕は、そのふざけた連中に向かって突進していた。

こちらを見ていた男に近づいたところで、僕は右足を大きく突き出し、その男の腹にけりを入れていた。男は驚きの表情で後ろによろめいた。女性を殴ろうとしていた男も、僕の勢いに驚き、あわてて向きを変えた。そして、そのせいで足をもつれさせた。それを見て取った僕は、間髪入れず、左脚で、その男に膝げりを食らわしていた。男はそのまま、しりもちをついた。

それから数秒で勝負はついた。

三人の男たちは、ばつの悪そうな顔で走り去り、僕は、半ば笑い、半ばベそをかきながら、その後ろ姿を見送った。

と、そこで、誰かの腕が僕の肩を抱いた。

「やあ、どうも。さっきは、助けが必要だと思ったんだけどな。あいつら、ほんとに胸くそ悪い連中だったし。で、あなた、だいじょうぶ？」

僕は、彼女の顔を見ながら、うなずいた。

彼女は、30歳くらいで、感じのいい女性だった……いや、もっとカジュアルな格好をすればという話だ。実際は、赤毛を短く刈り、とんでもなく分厚いめがねをかけているのだ。

「私、メアリー」

彼女が言った。

「おごるから、飲まない？」



僕らは、ちょっと歩いて、「トレース」 というバーに入った。

店内は、いやに薄暗くて静かだった。

酒を注文したところで、ちょっと口論になった。最初の酒は僕がおごると言う、メアリーが自分におごらせてくれと言ったのだ。しかし、けっきょくすぐにメアリーが折れ、僕らは、あれこれと話し始めた。

それは、いわば初対面の標準的な会話で、名前はなにで、どこに住んでいて、どんな仕事をしているか、といった内容だった。

しかし、その話の最中、メアリーは、少しずつ少しずつ距離をつめてきて、最終的には、僕らの腿や肩はぴったりと密着してしまった。

「あなた、今夜の予定は？」

ある意味二度目の経験でもあり、今

回ばかりは、僕にも、この状況がどっちを向いているかがわかった。そして、ちょっと考えたあと、とりあえず、最も安易な逃げを打つことにした。

「今夜は、ボーイフレンドとディナーの約束があるの」

でも僕は、彼女の率直さに、ちゃんと応えなければならぬとも感じた。

「あの……でも、なんか、複雑な誤解がある気がするんだけど……」

僕がもごもご言うのに重ねるように、メアリーは、ちょっとがっかりした様子で言った。

「なんだ、そうなの。私、てっきり、あなたはネコだと思ってた」

「ネコ？」

「ええ、女役。あなたも、私と同じでレスビアンだって感じたの。だから……。もっとも、私の場合はタチ、男っぽい方なんだけどね」

「あの……、だから、つまり……、複雑な誤解っていうのは、そこにあるわけで……」

そのあと僕は、四苦八苦ししながら、事情を説明した。

話しながら、僕はメアリーが怒り出すのではないかと思った。最悪の場合、殴られることも覚悟した。

でも、メアリーは大笑いした。自分の失敗を、豪快に笑い飛ばしたのだ。

「もう、このクソめがね！ もっと強い度を入れろって、目医者に言ってやらなきゃ。オーケー。やっぱり今夜は、私のおごりよ」

その店を出て別れを告げるまでに、僕らは親友になっていた。お互いの携帯ナンバーを交換し、つねに連絡を取り合うことを約束した。

僕は、彼女のことをすっかり気に入

り、彼女もまた——僕がレスビアンではなく、それどころか本物の女ですらなかったというショックを乗り越え——、友人関係をつづけたいと願った。

彼女はアマチュア写真家で、写真のデジタル処理についても興味を持っていた。そこで、近いうちに僕の部屋に来て、僕の仕事を見たいと言った。その時には、僕も彼女の作品を見せてもらうことになった。

そんなことで、僕がアパートに帰り着いたのは6時だった。それで僕は、ロバートに電話し、思い出し笑いしながら、今夜は僕の方が少し遅れるかもしれないと伝えた。

そして、ディナーに向けての準備に取りかかった。

注意深くひげを剃り、それから、シャワーを浴びながら脚や腕や脇の下に

ざらざらした感触がないかチェックした。そして、脇の下だけはそり直すことに決めた。

それが終わったところで、シャンプーし、香り入りボディソープで体を洗った。

体を拭きながらバスルームを出ると、バスタオルをボディに巻きつけ、今夜着ていく予定の服をベッドの上に並べた。

ロバートの電話から察するところ、今日行くレストランは、さほどフォーマルなところではないらしい。でも僕は、出来る限りフォーマルに装うつもりでいた。

昨夜洗ったパンティ、新品のパンスト、黒のスリッパ、ブルーのブラ、そして新しい黒のワンピースが並んだ。

ペニスを脚の間にたたみ込みながら、パンティをはき、生地が密着する

ところまでたくし上げる。

この時点で、もう僕は、興奮が高まってくるのを感じた。のどの奥が絞めつけられるような感じがあり、息づかいも荒くなりはじめている。

ベッドに座っても、そんな感じはなくならなかつた。パンストの袋を開け、それをくるくると巻いて、足先を入れ、脚の上にすべらしていく。肌に張りつくナイロンの感触はいよいよエロティックで、パンストを上げながら立ち上がった僕は、昂まりを沈めるために、部屋の中を歩きまわった。

それから僕は鏡の前で、体をひねるようにしてブラジャーを着け、カップの中にウレタンのパッドを入れた。もっといいおっぱいが欲しいけれど、注文したのが届くするには、まだ少し待たなければいけないのだろう。

黒のスリッパは、苦もなく身につけ

ることが出来、黒のワンピースを頭からかぶるのも、さほど問題はなかった。

両腕を背中に回し、首の後ろにひとつだけあるボタンをとめる。そのあと、ウエストラインに沿って生地を引っ張りながらねじれなどを直し、僕は鏡の中の自分の姿を見た。……ナイス！

髪をブラッシングしたあと、口紅を塗る。今夜は、アンネと買った赤い口紅にした。一度はやり直したものの、それだけできれいな形に決まった。

ほお紅をはたき、アイシャドーをのせる(濃くなり過ぎないように気をつけて)と、鏡の中で一人の女が動き出す。

ピアスは、もっと手の込んだものをつけたいところだが、傷が落ち着くまで重みのあるものは避けるように言われていたので、小さなゴールドの球で我慢した。

最後に、黒のビーズでアレンジされた金のチェーンネックレスをつけた。

腕時計はどうしようかと思ったが、この外見には似合わないと考え、やめておいた。

黒のサンダルを履き、部屋の中を何度か往復してみる。

その一步一步ことに、スリッパがパンストとかすかにこすれ合い、そのスリリングな感触に、ふたたび動悸が速まった。

僕は、もう一度座り、髪を整えたあと、口紅とブラシをバッグに入れた。

そこでちょっと考えた僕は、キッチンからジップロック付きの小袋を二つ持ってきて、その中に、タンポンとナプキンを二つずつつめた。

ポケットティッシュ、電子手帳、財布。それらを入れて、バッグの用意は完了した。



しかし僕は、出かける前に、その中に、くるくると丸めたパンストと、T-デイの前日に履いていたシルクのブリーフも忘れずに入れた。

## 第6章

### 検証と発見

この間、何度も女装で外出したおかげで、最初の頃ほどの緊張はなくなっていた。それに、部屋で歩く練習をしたおかげで、ヒールで歩くことにも慣れてきた。

僕は、他の女性たちがどんなふうに歩いているかを観察して、バッグを手首にかけるように持ち替え、もう一方の腕もあまり大きく振らないようにした。

一直線上に足を出し、それに合わせて、ヒップも軽く左右に振る。

そんなふうに地下鉄の入り口に向かい、その階段も、ヒールを引っかけてころばないように注意して降りた。

時刻は6時45分。電車の中は混んでいて、あらゆるタイプの人たちがいた。

いくつかの視線が僕に注がれているのに気がついた。ことに、一人の男が、何度もちらちら見てきた。でもそれは、いぶかしがっているというより、好色な目だった。

同時に僕は、乗客たちのほとんどが、セーターかジャケットを着ていることが気になった。今夜ディナーのあとで服を脱がされたら、きっと寒いだろうなと思ったのだ。

そういう点では、今演じている役割は損だ。でも、それは、僕にとっては致し方ないことだろう。あるおばあさんの知り合いが、最近は夜遅くなると「little nippy」(※)になると言っていた。

(※訳注 ‘little nippy’ <肌寒い>の言いまじが。このままでは、「夜遅くなると小さい乳首になる」ときこえる。)

ロバートのマンションのドアマンは、僕が取り次ぎを頼むと、何の疑いもなく、そのまま通してくれた。でも電話だけは入れてくれたらしく、エレベーターを降りると、ロバートはすでに部屋のドアのところで待っていた。

こちらを見つめてきた彼の表情は、僕のドレスアップがいかにもうまくいっているかを表していた。

「すごく、きれいだよ」

ロバートは、そう言って僕の唇に軽くキスした。

彼はそこで、いったん部屋の中に戻り、すぐにジャケットをつかんで出てきた。ネクタイこそしていないが、スーツ姿だ。

「だけど、そんな薄着じゃ凍えちゃうんじゃないか？　なんで、カーディガンくらい着てこなかったんだ？」

ロバートの設問に、僕は解答した。

「A. あたしは、凍えるとはまでは思わない。B. あたしは、そんな服を持ってない」

と、ロバートはいきなり僕の手をつかみ、マンションを出ると2ブロックほど歩いた。そして、そこにあった店に飛び込んだ。「アヤマモ」という名のブティックだった。店内には、あらゆる種類の宝石類、スカーフ、美術品などが並んでいた。

「ロバート」

僕は、彼の耳元でささやいた。

「こんな店じゃ、何も買えないわ。だって、ただのスカーフが100ドルよ」

「僕は、買えるさ」

ロバートはそう言った。

僕がそれに反論しかかると、ロバートは僕を店の隅へと連れて行った。

「テリー、君は、こういうことにもっと慣れなきゃいけないと思うよ。愛す

る二人がいて、お互いに相手のためになにかしたいと思う。それが、いけないことかな。君が金銭的援助を快く思わないことは知ってる。でも、僕は、君になにか買ってあげたいだけで、君を買いたいわけじゃない。ここは、強情を張らずに、僕の望みを受け入れてくれよ」

僕は、その言葉自体より、むしろロボットの口調のやさしさに、引き下がることに決めた。

「わかったわ。だけど、あなたがリッチだから、あたしがひがんでるなんて思わないでね」

僕らはそこで、僕が肩からかけられるようにと、ショールを見た。そして、一枚のパシュミナ（訳注 最高級のカシミア）のショールを選んだ。全体はえび茶で、明るい紫と黒の縁かがりがしてあるものだ。

でも、それが、135ドルもするのを知って、僕は息をのんだ。

ロバートがブレスレットを見始めたので、僕はあわてて、彼を店の外に連れ出した。

肩の上にかかったそのショールは、僕を、もっとすてきに見せているように思えた。でも、ヒップにまわされたロバートの手が気になって、それを楽しんでいる余裕はなかった。僕らは、お互いの体を預けるようにして、そのレストランまで歩いた。

正直に言って、僕は、そのディナーことを、ほとんど覚えていない。

この夜は、僕にとって、女としての初めてのデートだったというのに、何年もたった今、その細部ははっきりしない。僕らは、その後も、何度となくいっしょにディナーに行っている。そ

これらの記憶の断片と入り交じり、入れ替わり、区別がつかなくなっているのだ。

ともかく、そのレストランで夕食をとったあと、僕らはビレッジを歩き、ストリートミュージシャンの演奏を聴き、宝石店のなんだかSMっぽい看板に笑い合った。「ピアス、あけます。痛いのと痛くないの、選べます」

そのあと、コーヒーショップでコーヒーを飲み、ロバートのマンションに帰り着いたのは、10時半くらいだったと思う。

ロバートが自分のジャケットと僕のショールをハンガーに掛け、それぞれがトイレを使い、僕の方は化粧直しもして、そこで僕らは、ソファに並んで腰掛けた。

今回、きっかけをつくったのは僕の



方だった。僕は、ロバートの体に寄りかかるようにして、そのほおにキスした。

「ほんとに、すてきな夜だったわ。ディナーも、それにスカーフも。ありがとう」

ロバートはそれにちょっと微笑み返し、今度は彼の方から顔を寄せてきた。「もう一度、キスして」

僕は、ふたたび唇を近づけた。最初は、やはりほおに。そしてそれを、唇へと移動させた。

ロバートは両腕を僕の体にまわし、その舌は僕の舌を求め、唇を割って入ってきた。

二人とも、この前のように緊張や動揺はなかった。僕は、リラックスし、ロバートの動きに素直に反応していた。

気がつくのと、僕のペニスは、張りつ

めて、パンティとパンストに必死であらがっていた。

ロバートの手は、次第に僕のお尻の方に下り、そこをなで始めていた。僕は、彼のシャツのボタンをはずしていき、そこから現れた胸毛の間に、指をすべり込ませた。

それから僕らは、一枚ずつ、お互いの着ているものを脱がせていき、最後には、彼のブリーフと僕のパンティだけが残った。

そのブリーフの薄い綿生地を通して、彼のものが脈打っているのがはっきりとわかった。僕は、息をつめ、おずおずとその上に指を這わせた。そして、指先でその輪郭をなぞった。

ロバートは、あえぎながら言った。「あー、あせらないで、ゆっくりと」「……んふ、こんなになってる」

僕は、ちょっとからかうように言い、

その指先をブリーフのウエストバンドの下に忍び込ませた。

そんなふうにしなながらも、僕は怯えていた。言うまでもなく、自分以外の男のペニスに触れるのは、これが初めてなのだ。

しかし一方で、僕自身のそれも最大限に怒張し、押さえつけられているせいで痛みさえ感じた。今、僕はなにより、自分自身がやろうとしていることで興奮しているのだった。

そこで僕は、いったん動きを止め、顔をロボートの胸毛の中に埋めた。

すると、彼の手は、僕の裸の背中の上をやさしくなでた。

僕は、彼のブリーフの中の手を、少しずつ奥へと差し入れていった。最初、指先が張りつめる亀頭に触れ、そして、手の中に太いシャフトを感じ、最後は、手のひら全体で二つのボールを包み込

んでいた。

僕はその手をさらに前後に動かしつつ、ロバートの体がびくりと震えるたびに、ちょっとスローダウンして彼の興奮を長引かせた。

「ああー、テリー」

彼がまた、あえぎ声とともに言った。「ベッドルームに行かないか。ソファを汚しちゃいそうだ」

僕らは、ちょっとぎこちなく体を離し、ソファを立った。と、ロバートの手が、僕のパンティの後ろに添えられ、僕らは体を密着させたまま、ベッドルームへと動いた。

そこで、彼がベッドカバーと毛布をはねのけ、僕らはシーツの上に身を横たえた。

そして次の瞬間には、僕らはふたたび、お互いの体を抱きしめ合っていた。

僕は、彼のシャフトに手を伸ばし、それをブリーフから出して、握った手をゆっくりと上下しはじめた。

ほんの数秒だった気がする。僕の手の中のロボットのものが、グッと固さと太さを増した。

男である僕にはそのサインがわかり、僕はさらにストロークを速めた。

大量の精液が、かたまりとなって、何度も僕たちの体の間に噴出した。

彼と僕の腹部が、ねばねばしたもので覆われた。

それを見た瞬間、僕の胃のあたりで、また、例の吐き気の波がこみあげてきた。

僕は、心の中で、この間よくやっているマントラを唱えはじめた。

「あなたは彼を愛してる。彼はあなたを愛してる。あなたは彼を愛してる。彼はあなたを愛してる。あなたは彼を

愛してる。彼はあなたを愛してる。…  
……。」

オルガスムの高みから下降してきたばかりのロバートは、僕がその瞬間、そんなパニックに陥っていることに気づかなかったようだ。僕の首のあたりにキスしながら、感謝の言葉を述べ、そして、どれほど僕のことを愛しているかささやいた。

気がつくのと、背中にあてられていた彼の右手がゆっくりと下りていき、僕のパンティの中に忍び込んだ。そして、その指が、お尻の割れ目を分けるようにして、その間に差し込まれた。

僕はハッとして、両手で彼の胸を突き、逃げようとしていた。

「待って」

彼がささやいた。

「あせらないで、ゆっくりと、だろ。君を傷つけるようなことは、しないよ」

その言葉どおりゆっくりと、彼は僕のパンティを下ろしていき、脚から抜いた。そして、僕のを握ると、それを見つめながらしごきはじめた。

「きれいだよ」

自分自身を「きれい」かどうかという観点で見はじめたのでさえ、つい最近のことだ。自分のペニスを「きれい」などと考えたことは、僕にはなかった。それで僕は、どう返事したらいいか戸惑い、代わりに、彼の頭を抱くようにして、そのてっぺんにキスしていた。

ロバートは、僕のをしごきつづけたので、僕も次第に夢中になり、彼がもう一方の手で、サイドテーブルの上に置いてあったらしいローションを取ったのに気づかなかった。

そのコールドローションが、股の合わせ目と睾丸に触れたとき、僕は、思わず悲鳴のような声を上げていた。で

も、それが、僕に出来たせいぜいの抵抗だった。僕は彼の手の動きに体を揺らしつづけ、ロバートは、股の合わせ目から後ろに向かってマッサージをはじめていた。そして同時に、顔を僕のものに近づけ、舌の先で、そこをくすぐりだした。

ロバートは僕のペニスをくわえたり、なめたりしながら、後ろにまわした手で、アヌスのまわりをなでさすり、時に、指の先をそこに入れたりした。前への刺激に僕がもだえるたびに、その指は、次第に深く入ってくるようになった。

やがて彼は、寝ている位置を変え、一気に、僕の奥深くに向かって指をすべり込ませた。

その瞬間、僕の頭にはふたつのことが浮かんでいたと思う。ひとつは、痛みに対する恐怖。そして、もうひとつ



は、彼の中指が僕のアヌスにつき立っている光景。しかし、ふたつ目のことは、あきらかに僕のまちがいだった。彼が挿入していたのは、中指ではなく親指だったのだ。僕の中に入った指と、他の4本の指とで、片方のお尻をつかむような感覚があったことで、それがわかった。そして……

僕の中で、その親指が動いたとき、僕はのけぞっていた。でもそれは、けっしていやな感覚ではなかった。僕が怯えていたようなものとは、まったくちがっていた。

その感覚と、そして、彼の唇が僕のシャフト全体を呑み込んだ感覚とで、僕は、雷に打たれたようなオルガスムに達していた。ヒップがけいれんし、大きな叫びが口から漏れた。

しばらくして、二人で並んで横にな

ったところで、彼は、僕の後ろにまわした手の指先を、また、そこに入れてきた。

「僕は、君を傷つけなかったよね？」

「……ええ」

僕は、ささやくように言った。

「すてきだったわ。体中が熱くて、なにかでいっぱいになって……」

そんなふうに僕らは、混じり合う二人分の精液と情熱の中で、まどろんでいた。おたがいの腕に包まれながら。

目覚めると、ロバートは、ベッドの上に座って腕をもんでいた。

「へんな姿勢で眠っちゃったから、筋がつったみたいなんだ」

僕はそこで、ベッドサイドの時計を見た。1時53分だった。

「泊まってっても、いい？」

「ああ、そう言ってくれるのを待って

たよ、ずっと」

僕のおでこにキスしながら、ロバートは言った。

「ふー、明日になったら、シーツを替えなきゃな」

ベッドを出た彼は、バスルームへと向かった。

彼が出てきたところで、入れ替わりに僕が入り、シャワーを浴びて、顔と体を洗った。

バスルームを出てくると、ロバートは、電気を消したままのリビングルームで、ひとり腰掛けていた。窓から入る街の明かりだけで、彼の姿はよくわかった。

「ハニー」

僕は、ちょっと不安になって声をかけた。

「どうか、したの？」

ロバートは、窓の外の夜景を見つめ

つづけながら、言った。

「僕は、君に、無理強いしてるんじゃないかな？」

そして、こうつづけた。

「僕は、6ヶ月以上の間、ずっとこんな日を夢見つづけてきたんだ。だから、思いが強すぎて、君に一度に多くを求めすぎてるのかもしれない。君を愛したい、君に僕の気持ちをわかってほしい、君に愛することのすてきさを教えたい。君といっしょに旅行にも行きたい、ショーも見たい……。でも、たがらこそ僕は今、君に去られることを、怯えてるんだ」

ロバートは、ひとりがけの椅子に座っていた。だから、隣に座ることは出来ない。かといって、膝の上に身を預けるのも、この瞬間にはふさわしくない気がした。

それで僕は、床に腰を下ろして、彼

の脚にもたれかかった。

「ロバート、あたしだって怖いよ。あなた以上に怯えてるわ。冷静に考えれば、あたしたちのやってること……ううん……あたしのやってることは、気味の悪いうんざりするようなことだと思っただけ。でも、もうあたしは、これを止められない。あなたの中に、なにかを見てしまったから。それがなんなのか、今のあたしにはわからないわ。でも、あなたに誘われて初めてこの部屋に来た夜から、ものごとは、100パーセントこっちに向いてたような気がするの。もちろん、あのころ、あたしはそれを嫌ってたわ。でも今、あたしは、あのころよりずっと気持ちがいっしょくたしてるし、それに、愛されてることを喜んでる」

そこで一息ついて、僕は、彼がなにか言うのではないかと待った。でも、

彼はまだ静かに座っていた。

「……ふふ、友だちのアンネがね、いい結婚生活っていうのは、お互いが相手のためになにかしたいって思えたとき、初めて実現するんだって言ってたわ。もちろん、あたしたちは結婚してるわけじゃないし、たとえ法律がそれを許したとしても、あたしたちがいつまでもそんな思いを持ちつづけられるかどうかはわからない。でもね、ロバート。あたしにはもう、これを止められないの。あなたといっしょに、いたい」

話している最中、僕が目から涙があふれ出していた。そして、ロバートもまた、泣いているのがわかった。

そこで僕らは立ち上がり、無言のまま抱き合った。暗い部屋の中で、僕らは、お互いの体を、きつく抱きしめていた。それは性的なものではなかった。

いわば、友情に結ばれた二人の人間が、お互いをなくさめ合い、励まし合っている。そんな抱擁だった。

それから僕らは、ベッドに戻り、目覚ましが鳴り出すまで、ぐっすりと眠った。

## 第7章

僕がロバートのためにしてあげられること

僕が期待していたのより1日遅れで、「ラッセル・ハードウェア」社からの小包が届いた。何点かオーダーしたはずなのに、ひとつしか来なかったことにしばらく首をかしげていたのだが、全部いっしょに梱包されているのだと気づき、急いで箱を開けた。

中には、僕のおっばいが入っていた。バスルームに走り、Tシャツを脱いで、そのシリコーンで満たされたフォームをブラに挿入する。なにより重さがすてきだし、フォームが体温になじんでくると、まるで本物のように感じられた。

部屋の中を歩きまわって、その揺れを楽しみ、そうこうしているうちに、



床になにかの紙が落ちているのに気づいた。拾い上げて、その伝票を見たところで、他にも重要な商品が注文してあったのを思い出した。

「そうだったわ」

あわてて、箱のところに戻り、その中にあったふたつのガフを脇によけ、両面テープの箱を見つけ出した。

その箱に書かれた使用説明を読んで、また、急いでバスルームへと戻った。

まず、自分の肌をよく洗い、水分を拭き取る。

次に、二つのフォームの裏側を洗い、乾かす。

そして、テープの小片を三枚ずつ、それぞれのフォームに貼る。

最後に、もう片面の紙をはがし、自分の胸に押しつける。

そのまま、30数える。

……押さえていた手を離すと、さっきの重みが直接肌を引っ張った。

鏡を見ると、実際の肌とは微妙に色がちがうフォームのエッジがわかったし、胸の谷間を見せるというのも難しそうだった。しかし、たとえそうであっても、鏡の中の姿は、僕を興奮させた。

僕は、その上から、Tシャツを直接着てみた。その生地を通して、乳首の存在がわかる。宣伝によれば、それは「適度に立っている乳首」のはずだった。それなのに……。

ああ主よ、彼女たちははっきりと「こんにちは。あたし、乳首よ」と言っているのではないか。

箱のところに戻った僕は、今度は、ガフを出して装着してみた。

その中に、注意深く僕自身をたたみ込み、ふたたび鏡の前に立った。

その姿は、まちがいなく女性だった。

僕の下腹部から、出っ張りが完全に消えているのだ。おまけに、表面に施されたレースが、その生地 hardness ささえもわからなくしていた。

ロバートもきっと、僕のこんな姿を気に入ってくれるだろう。でも、スカートの中に手を入れたとき、その感触に失望するかもしれない。今や彼は、人目がなくなったと思うと、すぐそんなことをするのだ。

ロバートの部屋に初めて泊まった日から、3週間半が経過していた。

その間、僕は、ショッピングやインターネット通販で、たくさんの服を買っていた。おかげで、僕は今、毎日着替えるのにじゅうぶんなアウターを持っているし、ロバートの部屋に下着の替えさえ置いていた。

そうそう、ロバートの部屋と言えば、あの翌朝のことは書いておかなければならないだろう。あの朝、僕らは、おたがいの腕に包まれたまま目を覚ました。

そのあと、興奮しすぎないように気をつけながら、いっしょにシャワーを浴びた。そして、ソファのまわりに散らばったままになっていた二人分の衣類を、いっしょにかたづけた。

そこでロバートが新しいシーツを出してきたので、二人でベッドメイキングした。

ベッドを挟んで、両側からシーツを広げているとき、僕は言った。

「ねえ、あなた。あたしたち、いつの間に夫婦になったのかしら」

その言葉に、ロバートは赤くなった。真っ赤な顔で、なにかもごもごとつぶ

やいた。

それを見て、僕は笑いながらつづけた。

「あたし、あなたに、もうひとつの夢を見てしまいそうよ」

ロバートは照れたように笑い返し、僕と結婚して家庭を持つという空想を、よくするのだと白状した。

ただ、問題は、ニューヨーク州の法律が、それを認めていないことだった。

それからさらに数週間、僕らはお互いの部屋を行き来しながら、お互いのことを深く知り合っていた。

ロバートは、新しいおっぱいを気に入ってくれた。でも、セックスの時、リアルな僕に触れられないことが不満だと言った。それで僕は、テープの量を減らすと約束し、バックの中にはいつも、剥離剤のスプレーを入れておく

ようになった。

彼はやはり、ガフが気に入らないようだった。でも、僕の服のいくつかには、どうしてもそれが必要なのだということに納得してくれた。

僕は彼に、スニーカーをちゃんとかたづけることを約束させ、大恐慌時代の遺物のように見えないオシャレな帽子を買わせた。

僕らは、お互いが大切にしていることは尊重し合い、その他のことでも、相手の好みをむりやり変えさせるようなことはしなかった。

だから僕は、ゲイとしてのセックスにも慣れる努力を重ねていた。ことに、ロバートがいつもしてくれるフェラチオを、僕も試みていた。今のところ、最終的には手でイッてもらっているが、彼のものにちょっとキスし、軽くくわえるくらいは出来るようになって

た。

それにしても、彼と僕がセックスする機会は、僕が予想していたのよりは少なかった。会っても、キスしてお互いの部屋に帰ることが多かったし、そのまま、何もしないで寝てしまうこともよくあった。そんな時はもちろん、抱き合って眠るのだが。

そんな暮らしを送る自分自身に対する違和感も、どんどん薄らいでいった。

自分のアパートにいたある夕方、僕はまた、アンネとともに「女の子どうしのショッピング」に出かけた。

僕は、オリエンタルショップで青いミニのローブを買い、ヒップまでしかないシースルーのベビードールとそろいのパンティを、ブライダルショップで買った。

そんな買い物をしたせいもあり、僕

はアンネとの会話の中で、僕らの性生活についても触れることになった。アンネは、それがうまくいっていると言って、自分もうれしいと言ってくれた。

ショッピングの途中、偶然、メアリーと出くわした。

僕はアンネにメアリーを紹介し、メアリーは、僕らがどんなふうに出会い、その後、どんなつきあいをしているのかを説明した。僕はときどき、彼女の写真の後処理を手伝ったりしているのだ。

僕ら三人は、いっしょに街をぶらぶらし、メアリーとアンネはすぐにうち解け、意気投合した。三人でアイスクリームショップのテーブルに着いた頃には、その会話はますます熱を帯びていた。

そんな二人の様子を見ながら、僕は急に、なにかが腑に落ちた気がした。



ピーターとアンネ夫婦の間にある、ある種の問題に気がついたのだ。

アンネは、あきらかにメアリーに熱い視線を注いでいた。ちなみに、メアリーの側も。

以前、アンネとピーターが言い争っていた原因は、おそらく、ピーターが僕を見ていたからではない。アンネが、女としての僕を熱心に見つめていたからなのだ。

彼ら二人の性的指向は、そんなすれ違いを抱えているにちがいない。

まずいことに僕は、アンネにメアリーを紹介することで、彼ら二人の危うい関係に、新たな火種を投げ込んでしまったようだ。

「アンネ、そろそろ帰らない？」

僕が声をかけると、アンネもうなずいた。僕ら二人は、メアリーのほおに軽くキスしたあと、無言のまま帰路に

ついた。

「ねえ、アンネ」

アパートに着いたところで、僕は言った。

「あたしは、目をつぶってたわけじゃないし、男だったときほど、鈍感でもないのよ」

アンネは、ひとつうなずいてから、こう答えた。

「ええ。でも私は、ピーターを愛してるわ、……たぶん」

僕らはそこで、またいっしょにショッピングに行こうと約束して別れ、僕は、買ってきた物を整理するため、自分の部屋に入った。

## 第8章

### 僕がロバートのためにしたこと

もしあなたが、ニューヨークで楽しい時間を過ごしたいと考えるなら、そして、イタリア料理が好きなら、イーストサイド84番街の「カフェ・グレージー」がおすすすめだ。お値段はちょっと高いが、料理はおいしいし、サービスも行き届いている。まあ、これは、以前からよくここに行っていたロバートの受け売りなのだが。

ある夕方、僕らはこの店で、早めのディナーをとることになった。ロバートが電話で、6時に落ち合おうと言っていたので、僕は10分遅れで店の前まで行った。そして、それから8分後に、ロバートが、「会議が長引いて」という言い訳とともにやって来た。

店に入ると、まるで、久しぶりに旧

友がやってきたとでもいうような歓待を受けた。

僕は、白と黒のスカートとホルターネックの黒いトップスを着、その上から黒のカーディガンを羽織っていた。もちろん、ハンドバッグは持っていたが、それ以外にもジッパーつきの布バッグを持ってきていた。

この夜、僕は、ナーバスになっていた。昼の電話で、ロバートは「今夜は、早めに食事して、ベッドで過ごそうよ」と言い、わざわざ僕に「それで、いいね？」と念を押してきたからだ。

僕はその言葉が気になって、ロバートが新しいビジネスパートナー、ジム・クラインについて話すのにも、どこか上の空だった。その資産家は、データベースと携帯電話関係の開発を進めるあるベンチャー企業に、ロバートを通して投資しようとしていることだけ

はわかったが。

ワインと緊張のせいで、ディナーの間、僕は何度かトイレに立った。もうこの頃には、女子トイレにも平然と入れるようになっていた。

ちなみに、初めて僕らの部屋以外のトイレを使ったときは、ひどいパニックに陥った。あれは、古い写真の記録を調べに図書館に行ったときだ。急にもよおした僕は、おどおど隠れるようにトイレに行き、ノックさえせずに個室に飛び込んだものだ。トイレには誰もおらず、怪しまれることもなかったのが幸이었다。

それはともかく、ディナーを終えた僕らは、タクシーを拾ってロバートの部屋に戻った。

彼がメールを確認している間、僕はなんとなく手持ちぶさたで、雑誌を開

いたりして過ごした。そして、ロバートがそれを終えたところで、僕は、「先にベッドルームに行つて」と言い、布バッグを手にバスルームに向かった。

そんな僕を、ロバートは不思議そうに見ていたが、言われたとおりのようだった。

バスルームに入るとすぐに、僕は服を脱ぎ、ブレストフォームも取った。今日はそのつもりだったので、テープもほとんど使っていなかった。ブラにつづいてパンティも脱いだ僕は、冷たい水でその部分を軽く洗った。

そして、布バッグから取り出したチューブをしぼり、指の上にそのクリームを出した。それを、アナルのまわりに塗り、内側にも押し込むようにした。

その後、手を洗って、口をすすいだ僕は、バッグから、この前ブライダル

ショップで買ったベビードールとパンティを取り出し、身につけた。

ベッドに腰掛けたロバートは、入ってきた僕をじっと見つめてきた。

近づいた僕は、彼の膝の上にまたがって座り、そのおでこにキスした。

「ロバート、大好きよ」

むしゃぶりつくように抱きついた僕は、そのまま、ロバートをベッドの上に押し倒していた。

しばらくの間、僕らはキスを繰り返し、お互いの体をまさぐり合った。

と、そこで、ベッドを立ったロバートは、バスルームへと向かった。小用を足す音が聞こえ、その後、手を洗う音と口腔清浄液を使う音が聞こえた。

彼が出てきた時、僕は、さっきロバートが腰掛けていたのと同じところに座っていた。そして僕らは、さっきと

同じことを立場を替えて繰り返した。

「ロバート、あたし、あなたの悦ぶことが、したいの」

「どういう、こと？ ハニー」

僕は、そこでちょっと口ごもった。

僕にはもう、覚悟はできていた。でも、僕が何も言わなければ、それは始まらないのだろう。

僕はさらにもごもご言った末、恥ずかしさと、ちょっとしたいまいましさとともに、その言葉を口にした。

「ロバート、あたしを……犯して」

「いいのかい？ 僕は……」

まだそんなことを言っているロバートの口をふさぐために、僕は、彼の唇に僕の唇を重ねた。そして、ズボンの上から彼のものを握り、ロバートの背中をベッドに押しつけるようにして上に乗った。

でも、そこから先、どうしたらいい



のか、僕にはよくわからなかった。

前戯は、いわば、いつもと同じように進行した。

僕らは何度もキスし、お互いの体の上に手を這わせた。

ロバートが自分の着ているものを脱ぎ、僕のネグリジェも脱がせた。

彼の指が僕の秘部の中をまさぐり、僕は彼のものをしごいた。

と、そこで彼は、僕を仰向けに寝かせ、自分自身は隣に横向きに寝た。そして、僕の両脚を持ち上げると、その下に、自分の体のある角度ですべり込ませてきた。僕のそこに、ロバートのものの先が当たり、さらに圧力が加わった。僕は、自分の両脚の力を抜き、彼の体の上にかけるような形になった。

彼の手が僕のその部分を広げるように動き、僕はアナルの括約筋に、彼の

ペニスの頭がさらに強く押しつけられるのを感じた。

「力を抜いて、テリー、リラックスして」

瞬間、鋭い痛みが走り、彼のものが、僕の体の深くまで入ってきたのがわかった。体の中で感じる彼の大きさに信じられない思いがつのり、体が自然に緊張した。僕は深く息を吸い、リラックスしようとしてとめた。

彼の右手が、それに協力するように、僕の乳首をくすぐり、やがて彼は、ゆっくりと腰を動かしはじめた。

「ハニー、だいじょうぶだね？」

そう言うと、ロバートは、その腰を大きく突き出した。

僕は、すでに、ロバートのすべてが僕の中に入っていると思っていたのだが、それは永遠につづいているとでもいうように、さらに深く入ってきた。

次のひと突きで、燃えるような痛みが僕の体を貫き、僕は大きな声を上げていた。僕は、その痛みで歯を食いしばり、一瞬、ロバートに許しを請おうかと思った。

しかし、次の瞬間、そこには、えもいわれぬ充足感のようなものがわき上がった。

ロバートは、さらにその動きをつづけ、腰を前後に振る間隔を狭めていった。時に、それを、抜ける寸前まで引き、そして、深く押し上げるようにした。彼のボールが、僕のお尻の肌に当たるのがわかった。

その動きが次第に速くなるに従って、痛みが遠ざかっていき、僕はあえぎながらも、なんだか自分が、催眠術にでもかけられているような気持ちになっていた。

と、その速さが最大限に達したとこ

ろで、彼は、僕の腰を両手で握り、声を上げた。

「あーっ、テリー」

そして、僕の中で爆発が起こった。

誰かが腸の中に熱い油を注ぎ込んだような感覚に、驚いた僕も、訳のわからない叫びを上げていた。

ロバートはまだ腰を前後に振りつづけながら、その手を移動させ、縮こまっていた僕のペニスをつかまえた。

それをしごきながら、彼は腰の動きを次第にゆっくりにしていった。そして、そんな余波の中で僕をオルガスムへと導いた。僕のものからほとぼしたしぶきが、僕のあごまで達した。

僕らは、二人ともぐったりして、少しの間、ベッドに身を預けていた。

ロバートは、その部分の結合が抜けないようにしながら、ベッドサイドからティッシュを取ることに成功し、そ

れで、僕の体を拭いてくれた。

そんなふうにつながったままでしばらくたったとき、ロバートが、前後の動きを再開した。

僕の中で彼のものが大きさを増したのがわかり、そして、こすれるような痛みを感じた。彼にやめてくれと言おうかどうか迷っていると、僕に押しつけてくる腰の力がまた強まった。その、前回にも増す圧力とともに、僕の体の内側に、ふたたび精液が発射される熱さが伝わってきた。

二度目が終わると、彼はすぐにそれを引き抜いた。

僕は、天井を見つめながら、自分の感情がつかまえられないでいた。

今のは、どうだったのだろうか？ ..  
..すてきだった？ ...愛され、満ち足りていた？ いや、怯え、傷ついていた？ ...愛に満ちた、大人どうし

の交わりだった？ いや、変質的な、男どうしの淫行だった？

そのすべてが正しく、すべてがちがうように思えた。

ただ、初めて彼の唇にキスしたときや、また、初めて彼のペニスにキスしたときとはちがい、嫌悪感にさいなまれるようなことはなかった。

痛みはまだ残っているが、満足感の方がずっと大きい気がした。

ロバートは、僕の胸に置いた手をゆっくりともむように動かしつつ、時にキスしてきた。

でも、二人とも何もしゃべらず、静かな時間がつづいた。

「……ありがとう、テリー」

かなりの時間がたったところで、やっとロバートが口を開いた。

「今まで、ぐったりしてて、何も言えなかった」

僕がうなずくと、彼は言った。

「僕のこと、嫌いにならなかつた……よね？」

僕は、ロバートの体を巻き込むように仰向けにし、その上をまたいで立ち上がった。

「嫌いになんて、なっていないわ。でも、あたし、バスルームに行かなきゃ」

落ちていたパンティを拾ってバスルームに入った僕は、便器に座った。

ことをすませたところで、そこに置いたままになっていた布バッグの中から、ナプキンを取り出した。パンティの裏側にそれをあて(パトリックから借りた本のうち1冊には、アナルセックスに関する詳細で丁寧な記述があった)、それを履いてバスルームを出た。

ベッドまで戻った僕は、ふたたび、ロバートに寄り添った。

「あたし、また、してもいいわ。今夜は、もういいけど」

奇妙と言えば奇妙だが、そのあと僕らは、ベッドの中で、まるで何事もなかったように、テレビを見て過ごした。そして、しばらくしたところで、お茶でもいれようということになった。

僕はまたネグリジェを着て、二人で、街の夜景が見える窓辺に腰掛けた。

「もう、11月ね」

僕は言った。

「どうやら、あたしが出るなら、そのあとに入居したいって人がいるみたいなの。あたし、引っ越してきてもいい？」

「えっ？」

ロバートは、ハッとしたように僕の顔を見た。

「あ、ああ。もちろんさ。君の仕事机



はあそこに置けばいい。いや、隣にパソコンラックも置かなきゃいけないから……。とにかく、相談しよう」

僕らはそれから、家具のレイアウトについて、ああでもない、こうでもない」と議論した。それはまるで、なにか大事なことを先送りしているようでもあった。

そんな話が一段落したところで、ロバートは座り直し、まっすぐに僕を見た。

「どうしても、話しとかなきゃいけないことがある」

僕は思わず、唇を噛んでいた。ロボートの口ぶりから、それが重要なことなのはわかったし、僕にとってうれしくないことかもしれないという気がしたからだ。

「なに？」

「テリー、僕らの関係では、僕だけが

男の立場を独占してる。君が僕の中で果てることはない。それで、いいのか？」

僕は、ロバートを見返しながら言った。

「ええ、それはわかってるわ。でも、あなたはあたしを、べつのやり方で満足させてくれるもの。そんなこと、気にしないで」

そこで僕は、すこし考え、足先を宙に浮かせて、ロバートのローブの間にすべり込ませた。そして、彼の内腿あたりをくすぐりながら言った。

「でも、これだけは覚えといて。あたしは、男の呪縛から解放された女よ。ベッドの中の権利だけは、ちゃんと主張するわ」

ロバートは、笑いながらうなずいた。「僕は、君のいなやことはしない。君の望むことなら、何でもするよ。約束

したる」

## 第9章

### オペラの夜

11月中には、僕はロバートのマンションに引っ越していた。

当初はあったお互いのぎこちなさがとれる頃には、ロバートと僕の生活にも、一定のルールやリズムができあがっていった。

朝、彼は、僕といっしょにジョギングするようになった。

時に僕らは、彼のジムで、ラケットボールやテニスを楽しんだ。

僕には写真修正のため深夜まで働かなければならない場合があることを彼は理解し、僕もまた、彼がひんぱんに仕事を持ち帰ることを学んだ。

時折、メアリーとアンネが、僕らの部屋に訪ねてきた。メアリーは、自分の撮った写真に手を加えたい時に、ア

ンネは、ピーターとの会話が次第に減っているからだった。

僕らは、4人でいっしょに外出に出るようなこともあった。

そんな時、不幸を抱え込んでいるらしいアンネはあまりしゃべらなかったが、メアリーとロバートはすぐに意気投合した。

ある夜、仕事から帰ったロバートが言った。

「ジム・クラインのこと、覚えてるだろ。データベースの会社を持ってる。前に話したはずだけど」

僕は「なんとなく」と答えた。

「そのジムと奥さんが、僕らをオペラに招待してくれるって言うんだ。『コジ・ファン・トゥッティ』とかなんとかいうやつ。僕は、オペラなんて何にもわからないけど、ジムはいい人だし、

奥さんの方も、気にしなきゃ、まあだ  
いじょぶだ。仕事上でも、いい関係をつ  
づけたい人だし……」

「すてきじゃない」

僕は言っていた。

「きっと、メトロポリタン・オペラ (t  
he Metropolitan Opera) ね。でも、フ  
ォーマルな服で行かなきゃいけないん  
じゃない？」

「ああ、メッツ (the Mets) だって言っ  
てた。服のことは聞いてないけど、オ  
ペラの前に、ディナーもとるそうだ。  
もうひと組、知らないカップルも招待  
されてるらしい」

翌日には、ロバートが服装のことを  
確かめてきてくれた。それによると「ほ  
ぼフォーマル」ということだった。男  
性はタキシードでなく、ふつうのスー  
ツでだいじょぶだが、女性はやはり「ド

レスアップ」が必要なのだという。

その日まで、2週間の猶予はあったが、そんな服はない。

実際、クローゼットの中の僕の分をもう一度確かめたのだが、日常生活に必要な服はじゅうぶんそろっていても、「観劇」タイプの服はなかった。

僕は、あわててアビーに電話した。その後も彼女の店であれこれ買っていて、服の相談にもものってもらっている。

彼女は、マンハッタンにある何軒かの店を紹介してくれた。そして、豊かなヒップが必要な服と、胸の谷間が見えるような服は避けるようにと、あらためて忠告してくれた。

でも僕は、その忠告を気にしていなかった。じつは、胸の小さな人向け用の特殊なベルトを手に入れていたからだ。

ある朝、僕はロバートに、いつものネット通販ではなく、街に服を買いに行くと言った。そして、おそらくその額は僕の予算をオーバーするだろうから、来月のクレジットカードの支払い時には、助けてもらうことになるだろうと告げた。

と、彼は笑いながら答えた。

「まいったな。僕は、貧民救済施設送りになりそうだ。でも、君には、それくらいの価値はあるさ」

朝食の後、僕は、まるでビジネス・ミーティングにでも出かけるような服を着た。きちんとしてはいるけれど、ちょっとビレッジふうの遊びも感じさせる服だ。

行き先は、チェルシーホテル内にある「ザ・クローク・オブ・ホールズ」という店。なんだか変な名前だ（店名



なら「ザ・ホール・オブ・クロークス」じゃないの?) (※)。でも、行ってみると、ちゃんと洋服店だった。

(※訳注 ‘Cloak’ は「マント」「外とう」の意。「ホールの外とう」は変で、「外とうのホール」〈服屋〉だろうと言っている。)

出てきた店員に店名の由来をきいてみたが、彼女も知らないそうさ。彼女が知っていたのは、夜の外出に女性はいかに装うべきか、そして、来店客にいかにか多くのお金を使わせるかだった。

ラックには、たくさんのドレスが掛かっていた。たいていは、細身のサテン地で、ネックラインはベルベットのドレープ（実際には見えなくとも、その下にある乳房をほのめかすためだろう）で飾られている。ヒップ近くまでスリットが入り、一歩ごとに、そこからのぞくものの持ち主を強調する仕掛

けだ。

僕は、一着のドレスに目をとめた。ウエストを2本のダーツでしぼったシンプルなデザイン、ネックラインはスクエアなカットで、足首まで隠れるロングドレスだ。素材はラフ・シルク。色は黒なのだが、生地が揺れると、光線の加減で赤っぽく見えたり緑っぽく見えたりする。

僕は、それを取り、試着室で着てみた。

ビーズを編み込んだヘアスタイルを除けば、鏡に映った姿は驚くほどエレガントだった。

女店員が1インチほど裾を折り込み、まち針でとめている間、僕は、鏡の中の自分自身を息をのんで見つめていた。

これまで僕が着てきた服は、いつもどこかにテランス・カーンが顔を出し

ていた気がする。それに比べて、このドレスは、彼の存在を消し去っていた。

ネックラインは、僕の体型からいえばちょっと開きすぎなのだが、例のベルトのおかげで、いくらかの谷間があるように見えていた。もともと細身の人を想定したデザインらしく、ヒップがなくてもおかしく見えない。両肩に半袖ふうにつけられた二枚の布が、僕の二の腕を隠してもいた。

僕は、ちょっと震える声で、値段をたずねた。

「たいへんお安くなってますよ」

女店員は言った。

「クリア・デポなのに、たった487ドルなんです」

たった……487ドル。あいた口がふさがらなかつた。

たしかに今朝、ロバートに高くなるだろうとは言ったけれど、これは問題

外だろう。

しかしそこで僕は、この前、ロバートが言っていたことを思い出した。

「このスーツ、セールだったから、410ドルで買えたよ」

僕も、それに釣り合う女じゃなきゃいけないだろう。

「で、裾あげは、いつまでに出来るの？」

5日以内にお届けします(お届け！やっぱりこれまでとは世界がちがうんだ！)という約束を得て、僕はその店を後にした。

靴は、とりあえず今ので間に合うだろうが、持ち手つきのハンドバッグではだめだろう。僕はディスカウントのバッグショップに寄り、黒地にシルバーメッシュのクラッチバッグをたったの34ドルで手に入れた。

あのパシュミナのショールは、遠出するのでもない限り、さっきのドレスにも似合うはずだ。とすると、あと考えなければいけないのは、宝石類だけだ。

ピアスをあけたとき、あの店で買って以来、僕はジュエリーを買っていなかった。だから僕の手持ちのジュエリーは、安っぽい金メッキのチェーンか2本と、金のネックレスがひとつ、そして、小さな金の球がついたピアスだけだ。どうしても、おめかし用のものがあるだろう。

僕は、ブルックリン方面行きの地下鉄に飛び乗った。

「ザ・ダウンス」に着いたのはちょうど昼過ぎで、僕は、パトリックの昼食を中断させることになった。

パトリックは、「いらっしやいませ」と言いながら店主モードで近づいてき

たが、そこで気づいたらしく、「まあ、テリー！」と大声で叫び、僕を突き飛ばさんばかりの勢いでハグしてきた。

「ほんとに久しぶりね。見ちがえちゃったわ」

その抱擁は、僕がサンドイッチを買いに行くと言うまでつづいた。

店の奥に座って、買ってきたサンドイッチを開き、来店客の合間を縫ってパトリックと話した。僕がテランスとしてこの店を出て行ってから数週間のことを報告したのだ。

「パトリック、ダークなオペラドレスに似合う宝石が欲しいんだけど」

僕はそう言いながら、「ザ・クローク・オブ・ホールズ」の店員が渡してくれたドレスの端布(はぎれ)を差し出した。

パトリックは、それを灯りにかざしたり、ちょっと傾けてみたりしたあと、

言った。

「うーん、うちの店にはいいのがないわね。テリー、『ソロモン古美術宝石商会』って知ってる？」

知らないと言うと、パトリックはその道順を教えてくれた。でも、そのややこしさは、僕にタクシーに乗ることを決意させた。

店内を見ながら話のつづきをしていると、ロバートにちょうどいいマグカップを見つけた。その代金を払い、パトリックがそれを包装しているうちに、僕は表に出て、タクシーを拾った。

「ザ・ダウنز」が明るく愉快的な店がまえなのに対し、「ソロモン」は、暗くてミステリアスなところだった。

応対に出てきたのは、頭皮に張りついたような帽子をかぶった年配の男で、僕が「ザ・ダウنز」のパトリック

クの紹介で来たと言っても、それに対して何の反応も示さなかった。

でも、例の端布を渡し、オペラに行くのだと言うと、ちょっと乗り気になった。

「ふむ、なるほど、これには、ガーネットだな。それとも、ガーネットと黒玉(こくぎょく)か。パールは、だめだな。だめだ、だめだ、だめだ。あんたは黒髪だから、もっと印象的なものをつけた方がいい。ブロンドなら、ブロンドだけでじゅうぶんなんだがな」

彼は、そう言いながらキャビネットの間をのぞき込むと、奥にいるらしい誰かを呼んだ。

「おい、セリグ。この前のカナダからの買いつけ品、どこに置いた？」

と、奥から、まったく同じ服、同じ顔の男が現れ、抱えていた大きな段ボール箱をカウンターの上にどすんと置



いた。そしてそのまま、ひとことも言わず戻って行った。

その奇妙な光景に、僕は、危うく笑い出しそうになった。

「ああ、これだ。ここにあった。これこそ、まさしくオペラ用」

箱の中をがそごそかきまわしていた男は、そう言って、深い色の宝石と黒い金属のビーズのようなもので二重になったネックレスを取り出した。

「ガーネットと黒玉。短すぎるドレスでない限り、この生地には合う」

たしかに、男の言うとおりでらう。

でも、値札はどこにもついていない。それで、僕が、もう少し考えると言うと、男はベージュのベルベットの切れ端を取り出してカウンターに広げ、その上にネックレスを置いた。

「あんたは、イヤリングも欲しいんじゃないかね」

僕がイヤリングは、スーパーマーケットでも買うつもりだと言いかけると、男はすばやく、カウンターの上にひと組のイヤリングを置いた。ゴールドの小さな柱片から細い涙型の飾りがぶら下がり、耳に当たる部分には、ダイヤモンドがついている。

「ま、本物のダイヤじゃないがね」

男は、なにか陰謀めかした言い方で言った。

「模造宝石としては最高級だ。この輝きはあんたの肌を引き立てる。ついでに、あんたの手首には、これなんかどうだね」

と、今度は、ゴールドのチェーン・ブレスレットを取り出した。

「これだけそろえば、あんたはどこにでも出ていける」

そのベルベットの上のワンセットを見ながら、僕は突然、前にもここに来

たことがあるような気がした。

そして、すぐにそうではないことに気がついた。この雰囲気は、映画かなにかで見た外国のバザールのシーンにそっくりなのだ。どこかから、ラクダの鈴の音が聞こえ、香料の香りが漂ってきてそうだ。

「どれも、すてきだと思うけど……」

僕は言った。

「たぶん、予算が足りないわ」

すると男がまた叫んだ。

「おい、セリグ。これでいくらだ？」

と、また、奥から彼の双子の兄弟が現れ、カウンターの上を見ると「288。それ以上はまけられん」とだけ言って立ち去った。

「そうさな」

男はそれを引きとり、つづけた。

「しかし、今日は売れ行きがいまいちだ。あんたには大まけで、275。まさ

にお買い得。もってけ」

僕は、ネックレスを取り上げ、じっくりと見た。それは、光線をとらえて深く輝いていた。そして、イヤリングもまた、そうだった。

「200。それ以上出すつもりはないわ」

僕はいったい、どこでこんなワザを身につけたんだろう？

ほんの2ヶ月前までの僕には、こんな才はなかったはずだ。口の中で「すみません」とか言って、すごすご引き下がったにちがいない。

ところが今は……、僕は男の目を見て繰り返した。

「200！」

と、驚いたことに、こちらを見返した男は、そこで初めて笑って見せた。

「オーケー。まあ、たしかに275は厳しいかもしれん。だが、200だって？

そりゃないだろう。こっちだって生

活がかかっているんだ。じゃあ、260で  
どうだ？」

「だめよ、ぎりぎり225」

「245。さあ、買った」

「いいわ、でも……」

僕はため息をつきながら言った。

「それだと、あたし、なにか他の物を  
切りつめなくっちゃ」

すると、男はまた笑った。

「245。だが、それで終わりってわけ  
にやいかんようだな」

男はそう言って、僕を横の棚まで連  
れて行き、そこで、しばらくこちらを  
見ていた。その視線は、あけすけで、  
当惑するほどだった。と、男は突然、  
棚に手を伸ばし、そこからひとつの箱  
を取り出した。

「これは、もともと映画の小道具だが、  
あんたにや、きっと似合うよ。これで  
手打ちといこうじゃないか」

僕はその箱を開けてみた。と、その中に小さなブローチが入っていた。金の台と赤い宝石でミツバチがかたどられていた。

たしかに、僕に似合いそうだ。

僕は彼にお礼を言い、代金を支払って店を出た。

ロバートが仕事から帰ってきたとき、僕は本当にびくびくしながら、今日一日で825ドル使ってしまったことを報告した。でも彼は、それをまったく意に介さず、自分の仕事のことを話し始めた。彼の会社のスタッフがまとめたある取引が、この数ヶ月の間、大きな利益を生みつつづけているというようなことだった。

それから、僕らはそれぞれ、読書と写真修正に取り組み、そのあと、いっしょにベッドに入った。

例のドレスが届き、着てみせると、ロバートは最大限のほめ言葉で僕を称えてくれた。ちょうどその日、アンネが遊びに来て、彼女もドレスをほめてくれた。しかしやはり、こんなコンサバティブな服に、頭のビーズ編みは似合わないと言った。それで僕は、美容室に予約を入れた。

さらにその翌日だった。僕とロバートは、仕事のあと、「チャーリー・ドッグ」でメアリーと会った。

この日は、3人にとって、それぞれいいことのあった日だ。

僕は、いくつかの写真修正の代金として295ドルの小切手を受け取りに行った先で、それにつながるさらに大きな仕事を受注していた。

ロバートは、先週から進めていたあ

る契約がまとまった。その総額は、僕が聞いたら気絶するだろうと彼は言った。

メアリーの本職は弁護士事務所の助手なのだが、彼女がやった案件の調査を、ある弁護士が高く評価してくれたという。

僕らは全員、お祝いムードになり、いつものビールでなく、シャンパンのボトルを注文した。先に頼んでいたナチョス(※)やエッグロールとは合わない気もしたが。(※注釈 メキシコ料理。チーズをかけたトルティージャ)

と、バーカウンターで飲んでいた3人の女性がこちらを見た。最初、彼女たちはほほえみかけてきたが、そのうち、メアリーと僕の姿を上から下までためつすがめつ見はじめた。

僕はもう、こんな、こちらを値踏みするような視線には慣れていた。そし



て、自分が、いつの頃からか、彼女たちのお仲間、つまりレスビアンだと見なされることが多くなっているのもよくわかっていた。

ところが、この夜は、ちょっとちがうパターンでことが進行した。途中からまた、彼女たちの目つきが変わったのだ。そして、3人のうちの1人が、なにかを確かめるとでもいうように、こちらのテーブルに近づき、僕のことをあけすけに見た。さらに、そこで、笑いだしたのだ。

その笑い声とともに、彼女の発した言葉がこちらの耳に届いた。実際、店中に響くほど大きな声だった。

「やっぱりオカマよ」そして、「ち、クソ女装者が」。

僕らは我慢できず、バーテンダーのルーに目をやった。でも、彼には、しかめっ面で肩をすくめることしかでき

なかったようだ。

それで僕らは、店を出ることにした。

しかし、僕らがドアのところまで行ったところでまた、女たちの1人が、大きな声で言った。

「ヘイ、かわいこちゃん。あんたのために、すてきなポエムをつくったのよ。聞いてくれる？ ……………

お星様、お星様

お願い、聞いて

あたしがあたしになれますように  
こんなあたしはあたしじゃないの  
今夜、あたしの願いを聞いて  
かわいい女装子の夢を叶えて  
……………」

ロバートが、体を震わせながらなにか言いかけた。

しかし、それより先に、メアリーが拳をつくり、その女に殴りかかっていた。

僕は、あわてて彼女の腕に僕の腕をまわし、なんとかそれを押さえた。ロバートも、彼女のウエストをつかんでいた。そして僕らは、わめきちらしているメアリーをなんとか店から引きずり出した。

僕らが店から離れかかったところで、なにかがぶつかるような大きな音がした。振り向くと、例のレスビアンの女たちが、「チャーリー・ドッグ」から転がるように出てきた。ルーにたたき出されたにちがいがなかった。

メアリーをタクシーに乗せたあと、ロバートは僕の方を見て言った。

「あんなこと、よくあるのか？」

「まあ、たまにね。今日ほどひどくはないにしても」

「すまない、テリー。どうやら僕は、君を、とんでもない世界に放り込んだ

みたいだ」

僕は肩をすくめ、言った。

「べつに、あなたのせいじゃないわ。これは、あたし自身が、わかってて選んだ道よ。あなたといっしょにいられるってことは、あたしにとって、それくらい価値があることなの」

「いや、やっぱり僕は利己的だったよ」

ロバートは、さらにつづけた。

「自分勝手なファンタジーに君を引きずり込んだんだから。たしかに僕は、君が欲しくても手に入れられないものを用意したかもしれぬ。より安全で快適な住まい。君が買えなかった物を買えるだけの金。でも、そのことで、僕は君を、あんなあばずれたちの標的にしたんだ。それに、君を不満のはけ口にしながら連中の」

僕は腹を立てていた。

すてきだった夜が、いっぺんにイタ

いものに変わっていた。僕には、言いたいことが山ほどあった。

そして、僕は、嘔きあげた。

「いい気にならないですよ！ たぶん、あたしが待たせすぎたせいね。あなたはずっと門を開けて待ってたっていうのに。でも、そのせいで、望みが叶ったあなたは、有頂天になってるんだわ。安全で快適？ あたしの今の暮らしは、けっして快適なんかじゃないわ。あたしは、前の仕事場兼用のアパートが好きだった。がちゃがちゃしてても、あたしにとっては芸術的な気分にあふれてたんだから。お金？ あたしが今、あなたのお金で買ってる物を、いつあたしの方から欲しがった？ あたしは、あなたに同情して欲しいわけじゃない。ましてや、世の中から守ってもらいたいなんて思ってない。それから、いちばん大事で、ぜったい覚えといて

欲しいのは、あたしはいつでも、ひとりで出て行けるってこと。あたしが今、こうしているのは、セキュリティに守られた部屋のためでもなければ、もちろん、あなたがしてくれるすてきなフェラチオのためでもないのよ」

そこまでまくし立てた僕は、そこでやっと一息ついた。

僕らは、何秒間か、黙って見つめ合った。

「ねえ、ロバート。あたしは、あなたを、愛しています。それが、あたしたちがいっしょにいる理由でしょ」

そのあと僕らは、レキシントン・アベニューの路上で、しばらくの間抱き合っていた。

唇が離れたところで、ロバートが僕の顔を見た。

「でも、僕はまだ、君に、罪の意識を感じるよ」

そこで僕は、ロバートの腕に、思い切りパンチを入れてやった。

「どう？ これで、おあいこでしょ」

「痛てーっ。もお。ちがうだろうが」

ロバートは、痛そうにしながらも、その腕を僕の肩にまわしてきた。

「さあ、帰ろう」

その日からの数日間、僕らは、お互いの関係と境界線を、もう一度、手探りし直すとしてもいうような、静かな時間を過ごした。でも、オペラに行く予定の日までには、ふたたび、心地よい生活を取り戻していた。

当日、ロバートは仕事を早めに切り上げて帰宅すると言っていた。

オペラの開演は7時15分だが、それまでにいっしょに観る他のカップルたちとゆっくりディナーをとることになっていた。5時30分に「カフェ・モー

ツァルト」に来てくれということだ。

僕の方は、その日の朝、けっこう大きな仕事を納品し小切手を受け取るために、クイーンズまで出かけていた。部屋に戻ったのは11時くらいで、軽めのランチを食べたあと、メールを確認し、オンラインでいくつかの請求の支払いを済ませた。

さて、いよいよ準備の時間だった。

僕は、細心の注意を払いひげと体毛を剃り、シャワーを浴びた。髪を乾かしながら、新しいヘアスタイルにふさわしいセットをし、軽くパウダーをはたく程度のメイクをした。そのあと、ほんの少し香水をつけ、準備の第1段階が終わったのは、2時くらいだった。

それで、ロバートが戻るまで、僕はバスローブのまま椅子に座り、本を読んだ。ロバートが帰宅したのは、3時45分(約束より15分「しか」遅れてい



ない!)だった。

僕はこの日、ちょっとした「サプライズ・プラン」を用意していた。でも、ロバートとは同じ寝室で着替えるのだし、どうやって彼の目から隠そうかと迷っていた。しかし、うまい具合に、彼はまずシャワーを浴びると言った。彼のシャワーが異常に長いのは、今日ばかりは好都合だった。

シャワーのドアの音が聞こえたところで、僕はすぐに引き出しを開け、新しく買ったいくつかのアイテムを出した。

最初は薄い黒のストッキング。足を入れ引き上げると、その長さは、ちょうど太腿の真ん中あたりまでしかない。薄い生地からは、足先のペディキュアの色が透けて見え、空調のかすかな風が、素肌が出たままの腿をくすぐった。

それから僕は、黒と赤のガーターベルトをウエストに巻き、ストラップのクリップをストッキングにとめた。最初はとめる位置に戸惑ったが、何回かとめなおし、ストッキングのシームもまっすぐになった。

僕はそこで鏡を見たのだが、その姿は、かなり気味の悪いものだった。体毛のないスレンダーな体にガーターとストッキングを着けているのに、その中央では、勃起しかかったペニスが揺れているのだ。

あわてて、新しく買ったガフを着け、問題のものをその中に隠し込んだ。ガフの黒いサテン生地は、ストッキングともマッチしていた。

ブレストフォームにテープを着け、胸にしっかりと押しつける。押さえていた手を離すと、胸にその重みと震えが伝わり、この瞬間、僕は、自分が女

に変わっていくのを感じた。

ブラジャー（もちろん、黒）を着ける前に、僕は、例のベルトを手にとった。ちょうどブレストフォームの下あたり、つまりアンダーバストのボディにこのベルトを巻く。強い弾力のある素材を引っ張りながら巻きつけ、とめ具を背中をとめる。その上で、胸の肉を両脇から真ん中に向けて寄せるように押す。ベルトに押しえられた皮膚が、寄せられたまま止まり、ブレストフォームの間に胸の谷間をほのめかすくぼみができるのだ。

その上からブラを着け、足首近くまでであるロングスリッパを身につけた。

と、ちょうどそこへ、シャワーを終えたロバートが、体を拭きながら出てきた。彼は、僕の背後に近づき、いきなり体に両腕をまわしてきた。

「今はまだだめよ、カウボーイさん」

僕はくすっと笑いながら言った。

「セクシーになる過程の女に、ロマンスの時間はないの」

ロバートはちょっと笑って、「僕の価値はこいつより下ってわけだ」と言いながら、ハンガーからドレスをはずしてくれた。

受け取ったドレスを頭からかぶると、彼が背中ボタンをとめてくれ、そして、僕の耳元にささやいた。

「じつは、君に渡したいものがあるんだ」

僕が振り向くと、彼はさらにこう言った。

「君が、あのガーネットのネックレスを見せてくれたとき、僕はどうしようかと思ったよ」

その言葉に首をかしげながら見ていると、ロバートは、自分の小銭入れだとか時計だとか、その他あれこれの小

物を入れている引き出しをあけ、その中からなにか取り出した。

「じつは、君があれを見せたのと同じ日に、僕はこれを買ってたんだ」

それは、ブルーの小さなショッピングバッグで、側面には、見慣れたロゴマークが入っていた。「ティファニー」だ。

僕は、ロバートがそこから取り出すものを、なんだか怖いような気持ちで見ている。

最初に出てきたのは、長細い箱。次は、小さな四角い箱だった。

そこで彼は、僕に、鏡の方を向くように言い、後ろに立って、ペンダントのついた細いゴールドのネックレスをつけてくれた。ペンダントは三日月型で、そのカーブの内側に、まるで星が重なるようにダイヤモンドがひとつ埋め込まれていた。

次に彼は、小さな箱の方を僕の手を持たせ、そのふたを開いて中の指輪を見せた。小さな三つのダイヤが並んでいた。

ロバートは、僕の両肩を持ち、自分の方に向かせた。

驚いてポカンとしている僕の目の前で、彼は体をすたとんと落としてひざまずき、こちらを見上げてきた。

「テリー、僕らは実際には結婚はできない。でも僕は、君に誓いたいと思う。僕のパートナーになってくれないだろうか？ パートナーで、親友で、そして……僕の妻に」

本当は、笑ってはいけなかったのだろう。

でも、オペラのためのドレスを着、新しいダイヤモンドネックレスをつけ、指輪を持って立っている僕の目の前で、ひざまずいてロマンチックなフ

レーズをつぶやいているのは、真っ裸の男なのだ。

僕は、彼の耳をつかみ、それを引っ張って立ち上がらせ、彼の唇にやさしいキスをした。

「ロバート。イエスよ。あたしの命がつづくかぎり」

そこまで言ったところで、我慢できずに、またくすくすと笑ってしまった。

「なんだよ、なんかおかしいこと、言った？」

「ううん、ごめんなさい。たぶんあたし、ナーバスになってるのね。これまで、男の人からプロポーズされるなんて、考えたこともなかったから。特に、こんな、ありのままの男から」

それから僕らは、ネックレスについて、ちょっと意見が対立した。僕は、せっかくロバートがくれたのだから、

ダイヤの方を着けたいと言い、彼は、その方が似合うからと、ガーネットをすすめた。そして、けっきょく、すぐに僕が引き下がった。もともと、僕もそのつもりだったのだが、彼が議論に勝つ形にもっていきかけたのだ。

そして、僕は、その指輪をはめた。

一瞬後、僕は、ロバートの方を見てきいていた。

「だけど、どうしてあたしの指のサイズがわかったわけ？」

ロバートは、にっこりと笑いながら答えた。

「ハニー、君は、セックスのあと、ほんとにぐっすり眠るんだ。メジャーをあてても、身動きひとつしなかった」

5時までには、僕はイヤリングを着け、靴を履き、いつもより手の込んだメイクを完了していた。もちろん、女の子



の必需品セットもクラッチバッグの中に移した。

ロバートの、シルバークレイのたて縞が入ったブラックスーツもきまっていた。白のピンをとめたダークブルーのネクタイも、それによく合っていた。

並んで立つと、僕らはまさしく、ザ・カップルだった。

タクシーが「カフェ・モーツァルト」に着くと、すでにクライン夫妻は、そこで待っていた。そして間もなく、もうひと組のカップルも到着した。

お互いを紹介し合ったあと、僕らは席に着き、飲み物をオーダーした。

そこで僕は、テーブルに着いた全員をそっと見渡した。

クライン夫妻は、40台の半ばといったところ。

クライン夫人、エダは、なんだかぼ

一っとした表情の女性だった。それだけでなく、ディナーが始まってからの様子を見ていて、僕は、彼女は多少鈍いのではないかと感じた。会話にも興味を示さない。意見も持っていないようだし、オーダーするにもしどろもどろなのだ。じつは、何週間かあとに聞いた話だが、彼女は4年ほど前に脳卒中を患ったらしい。どうやらそのせいだったようだ。

もうひと組のカップルはバーデル夫妻といった。年齢は、だいたい僕らと同じくらいか。

夫のマイクは、ジム・クラインの会社でデータベースの開発をしているのだという。

妻のケイトもエレクトロニクス関係のエンジニアだと言った。

彼女がデジタル写真に造詣が深かったこともあって、僕らはすぐにうち解

けた。彼女は、フィルム・カメラは、もはや恐竜のようなものだと言張した。そこで僕はフィルムの味方になり、議論が弾んだのだ。

メインディッシュも終わり、その後、僕は、ウイスキーサワーやワインを飲みながら話していた。それらの飲み物が、いわば正常に僕の中を通り過ぎた結果として、僕は、許しを請い、トイレへと立った。

と、すぐに、ケイトが「私も行くわ」と立ち上がった。

この日に至るまで、僕は、なぜ女性たちが連れ立ってトイレに行くのかわからなかった。そんなこともあり、本当のことを言えば、いっしょに行くのはちょっと恥ずかしい感じもした。でも、僕は彼女に微笑み返し、僕らはともに、レストランの奥へと向かった。

幸いなことに、ここのトイレは、僕の家族が「ひとつ穴」と言っていた形式だった。それで僕は、ケイトに先を譲り、そのあとで、一人で入った。

用を足して出てくると、ドアのそばにエダが立っていた。そして、会釈して通り過ぎようとする、呼び止められた。

「ごめんなさい。私、持たずに来ちゃったみたいなの。あなた、持ってらっしゃらない？」

僕は、心の中でアンネの言外の助言に感謝しつつ、小さなポリ袋をそっと手渡した。

エダは、どこかはっきりしない顔で微笑みながら礼を言い、ドアの中へと消えた。

その後も、僕が人から借りることはないにしろ、僕のナプキンやタンポン（こっちもたまにはある）が減ってい

くところを見ると、けっして無駄な買い物ではなかったわけだ。

オペラは、すばらしかった。

まあ、おおよそ、二人の男が、フィアンセたちの気持ちをテストし、結果、自分たち自身の賢さと愚かさにハマってしまう……というような話だ。

このオペラハウスには、前の座席の後ろに翻訳字幕の出る小さなスクリーンがついていたので、筋を追うことくらいはできたのだ。それに、舞台装置は、これまであまり見たことのないようなものだった。

ロバートも楽しんでいたように見えた。でも、時折、僕の腿のあたりをさわってきた。

音楽、ディナー、すてきな社交、そして、ロバートの手の感触で、この夜のことはずっと忘れないだろう。

幕が下りたあとも、僕らは少しの間、オペラハウスのロビーにとどまり、談笑してから別れた。

ロバートと僕は、タクシーを拾い、部屋へと向かった。

タクシーの中で、僕は、なんだか体の中で、興奮と緊張が高まってくるのに気がついた。タクシーが、いやに遅く感じた。

ロバートと僕は、今度また、他のオペラを見てみようなどということ話を話していた。

僕らが、マンションのエレベーターに飛び乗ったのは、11時くらいだった。

部屋に戻ると、僕はまず、ロバートにシャワーを使わせた。

そして、彼が出てきたところでは言った。

「あたしもすぐ出るから、服を脱いで、ベッドの上で待っててくれる？ あなた」

ロバートはちょっと眉をぴくつかせたあと、微笑み返し、服を脱ぎはじめた。

バスルームに入ると、僕は、ネックレスをはずし、それから、イヤリング、ブレスレット、もちろん指輪もはずした。

ドレスを脱いでハンガーに掛け、それをドアのフックに吊した。

そこで僕は、鏡を見た。けっして美人ではないだろう。でも、じゅうぶんにセクシーだ。

次に、スリップとブラもとった。剥離剤を使ってブレストフォームをはずし、いつもの場所にしまった。

そのあと、湿したスポンジで胸を拭いて、ガフも取った。残ったのは、ガ

ーターとストッキングだけだ。

そこでまた、僕は、そんな自分の姿を1分間ほど見つめていた。

思い起こせば、あの会社のロビーで、見ず知らずの男と、ラケットボールについてのジョークを交わしたのは、まだ4月のことだ。それなのに……。

僕は、この半年あまりの間に自分がしてきたことに、本当に意味があったのかを考えていた。

そして、うなずきながら、声に出して言った。

「ああ、もちろんさ」

と、外からロバートの声が聞こえてきた。

「ねえ、テリー、何してるの？ さみしいよ～」

「もう少しよ、あなた」

僕は、くすっと笑いながらそう返事をし、透けた黒のベビードールを着て、



前のボタンをとめた。

それから、潤滑ゼリーを指にとり、自らのものに塗り込んだ。

そして、ロボートの待つベッドルームへと向かった。

ベッドに横たわったロバートは、黒のベビードールにガーターとストッキングの僕を、ポカンと見つめていた。

その目は大きく見開かれ、まるで、キャンディ・ストアに入った子供のようにだ。

ロバートと僕、どちらのペニスも、最大限に立ち上がっていた。そこで僕はベッドによじ登り、彼の上にまたがった。

ゆっくりと、彼のシャフトに向かって、体を沈めていく。

ロバートも、自分のものの根もとを手で持ち、それを正しい位置へとガイ

ドした。

体を少し前後しながら、それに合わせた僕は、彼のすべてが僕の中に埋まるところまで、腰を落とした。

「ロバート、お帰りなさい」

## おわりに

冒頭でも述べたように、これは実話です。

でも、私は、そこに若干の脚色を加えています。

このストーリーの時間的経過は、8ヶ月におよばないように見えるでしょう。しかし、実際には、ロバートと私が出会ってから、オペラの夜までには、おおよそ15ヶ月を要しています。

もちろん、登場人物たちの名前や、ロバートのビジネスの性格も変えてあります。

そして、たいていのことは、このストーリーに書いたほど順調に運んだわけではありません。

たとえば、Tーデイのあとの3ヶ月前後、私たちはひんぱんに交わりました。でも、そのうち何回かは、私にと

って苦痛な経験となりました。今では、私たちのセックスは素晴らしいものだと言えますが、そうなるまでには、それなりに長い時間がかかったのです。

その間、私は、トランスジェンダーの自助グループにも加わりましたし、いくつかの問題では、そのセラピストのお世話にもなっています。

とはいえ、多くのことは、かつても今も、素晴らしいものでありつづけています。

ロバートと私は、西70番街の、ファミリー向けの部屋に引っ越しました。同じマンションの住人の多くは、私たちのことを「11G号室の感じのいい若夫婦」と見なしています。

ロバートの会社は、順調に大きくなっています。私は、彼の助言を受け、パートタイムでも健康保険に入れる会社で働いています。

私たちが初めて出会ってから、すでに4年の歳月が流れました。

Tーデイの1回目の記念日に、私たちは、誓約を取り交わすパーティを開きました。その立会人になるために、アンネとメアリーのカップルをふくめ、1ダースの友人たちが集まってくれました。

そのあと、私たちは、ニューハンプシャーの田舎にあるロマンチックな宿で、4日間の週末を過ごしました。

今でも私は時折、鏡を見ている時、テランスがこちらを見つめているのに気づきます。でも、一日の終わりに、ロバートとキスし、ベッドに入るのは、まちがいなくテリーなのです。

CopyRight (C) 2006 by Marianne Wright

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この「テリーとロバート」は、マリアンヌ・ライトさんのオンライン小説“Terry and Robert”を、前橋梨乃が日本語訳したものです。原作著作権はライトさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。